
gradge

クロイ名無

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

gradage

【Zコード】

N7487Z

【作者名】

クロイ名無

【あらすじ】

主人公の深峰快は特に変わったところのない高校生春、高校2年生になつた日、友達の西又良^{にしまだりょう}や幼馴染の天野桜^{あまのさくら}などと話していると文通の話になり、快も文通を始めることに初めて早々『グラッジ』と名乗る人物と文通をすることにしかし、数日後に届いたグラッジからの奇妙なメールで快の人生は大きく変わる

恋愛、ホラー、推理（？）、いろいろ混ざった（混ざってしまった）

新ジャンル（？） 小説

小説＆まんが投稿屋にて連載済み

始まりのメール～序章～

To グラッジ From

春は出会いの季節だと友達から聞いたことがある。確かに、入学式やら進級などで出会いは必然と増えるだろう。卒業式を言えば別れの季節だが……まあ、そこは気にしないでおこう。とりあえず、春は出会いの季節だ。君と会えたのも何かの縁だと思つて、仲良くしていきたいと思う。よろしく

俺はパソコンに簡単に文を打ち、送信相手へのメールアドレスが間違つていなかを確認して送信ボタンを押した。

「ふう。流石に初めてのことってのは緊張するな。」

俺は椅子の背もたれに体重を預けながら、一息ついた。そのときにはもう、画面に『送信完了』と表示されており、引き返せないところへ来ているのだと実感できた。

「しかし、いくらなんでも俺までマジでやるとは思わなかつたな。」

俺は自分に呆れながら昨日のことを思い出した。昨日は始業式で、数週間ぶりにクラスの人と会つた。春休みということで、会わない期間は短いので、誰もそこまで変わつていなかつた。メールで話したりしていたので、直接は会つていなくても自然と話せる。その時に出てきた話題が【文通】。文通と聞いたときは「これまた古風なことを」と思ったが、実際は少し違つて、ただ単に専用のメールアドレスを作り、ネットに晒す。そして文通をして欲しいという内容を書き、そのメール宛に来た最初のメールの人と文通みたいにメールをし合おうというのだ。もちろん、晒すサイトはちゃんと友人のサイトで、注意として送るとどうなるかは書いてあった。俺は反対したが、皆がその話にのつたこともあって、その日からスタートしたのだ。そして、その日の夜、さっそく俺の元にメールがやつてきた。名前は『グラッジ』と書かれていて名前からは男か女かは分からぬ。内容は簡単なもので、挨拶だけで終わつていた。

「…………さて、そろそろ学校へ行く用意でもしとくか。」

俺は電源を落とし、立ち上がった。俺は狭い部屋の端にあるクローゼットやタンスから服を取り出し、着替えた。脱いだ服は綺麗にたたみ、タンスの中へ入れると、1階へ降りていった。

「あ、快君。おはようございます。」

1階へ降りると、幼馴染の天野 桜が椅子に座つてご飯を食べていた。昔から勝手に入つて（合鍵渡したのは俺だけど）勝手に食べているので、問題はない。長い黒色の髪にはウェーブがかかっていて、その髪は腰より少し上まで伸びていた。顔立ちはスッキリしていて、美少女と言えるほどの容姿。おまけに背が少し低いので、学校では人気者（マスク戻す意味を多く含む）の幼馴染だ。ただもう一つ、この幼馴染の左手がないことも、有名な理由だ。他にも背中に、大きな火傷の跡があるが……まあ、知つてるのは俺ぐらいだ。

「快君は朝、どうします？」

「え？ あ……どうしようか……。」

桜のこと気に取られていて返事が変になつてしまつたが、なんとか気づかれなかつたと思つ。」

しかし、朝か……。基本的に俺はあまり食べ物を食べない。とうより、食べられない。特に調理したものが駄目だつたりする。なぜ駄目なのか。それはよく分からぬけど、なぜだか体が拒否する。空腹が限界近くまでくれば食べられるが、基本的に食べようとすれば吐いてしまう。無理をすればなんとかなるが、両親が出張中ので、無理に食べる必要はあまりない。俺が食べないと両親が心配するから、その時のために体力は温存しておこう。……まあ、ただ食べたくない言い訳だけ。

「いや、いいや。」

「そうですか。」

桜はそう言つと、片手で器用にご飯を食べ、立ち上がつた。そのまま歩いていき、桜は食器を流しに置き、日曜大工が趣味の父が、桜のために付けた、食器を固定するものに固定して、食器を洗つた

「じゃあ、いきましょうか。」

朝なうえに桜は小食なので、さっさと食器を洗うと、カバンを持ち一緒に玄関を出た。昔から小・中・高と同じ学校へ通っているので、一緒に登校するのが普通になつていて。中学の頃は冷やかされたりしたが、俺も桜……は赤くなつて恥ずかしがつていたが、俺のほうは特に気にならなかつたので、いつも一緒に登校していった。桜自信も、恥ずかしがつても、毎朝俺の家まで來ていたので、本当に、単純に恥ずかしかつただけなのだろう。

「そう言えば快君。昨日、西又君と話していた文通のことなんですが、誰かから返事はあつたんですか？」

『西又君』とは、例の文通の提案者であり、本名は『西又 良』。楽しいこと一番を信念とさえしている奴である。現に、付き合いはそこまで長いほうではないが、今までに法律違反をギリギリで避けている感じだ。……つまり、解釈の仕方によつては法律違反をしているのだ。本人は、警察に捕まつたりしない限り無罪だと主張しているが、実際にはギリギリである。

「ああ。一応な。昨日の夜に來たんだ。」

「へえ。こいつてはなんなんですが、変な人ですね。」「変? どうじうこと?」

「あちらも専用のメールアドレスかもしだせんが、それでも見ず知らずの人にはアドレスを教えて連絡の仕合をしようとしてきたからですよ。」

確かにそう言われば変な人だ。とりあえず、俺だつたらメールは送らない。相当暇をしていたら別だが、それなら見ず知らずの人と連絡を取り合つより、友達にメールをした方が楽だし、楽しい。

「それで結局のところ、その文通は何をするんですか?」「何つて……普通に世間話をするだけだけど?」

「なんですか? 私、文通をやつたことがなくて、どんなことをするのか気になつていたんですよ。」

実は、桜は携帯すら持つていない。今の時代、なくては不便とま

ではないものの、持っていないのは珍しいが、本人が必要ないと言っているので置つてないらしい。

「特に特別なことをする気はないな。良なんかは相手が女性だったから会いたいって言つてたけど」

「快君も、もし近所に住んでいたら、一緒に出かけたりしないんですか？」

「ん~……どうだらう。」

「そうですか。……ところで、話は変わりますが、数日後にこの町の神社でお祭りがあるのは知っていますか？」

「祭り？」

祭りなんてあつただらうか？春祭り？……いや、ないだろ

「なんでも、ある国の首相さんの奥さんの生まれがこの町のようで、その首相さんと奥さんが数日前からこの町に来てるらしいんです。それで、出国前にお祭りをするらしいですよ。」

「へえ~。……それで、桜はその祭りに行くのか？」

「すみません。私はその日は用があるので、いけないんですね」

「そうか。なら俺も家にいるか。良と男2人で回るなんて悲しいだけだからな」

その後も、なんでもない雑談が続き、登校した。俺と桜は一緒にクラスなので、教室へ行き、席へ着いた。

「よう。誰かからメールは来たか？一応、お前以外に聞いたが、誰も来てないそうだ。」

席に着くと、さつきの話に出てきた西又 良が現れた。長身で、ボサボサな髪。元々の顔はいいはずなのに、性格ゆえにヘラヘラした顔になり、一部の女子に『残念なイケメン』と呼ばれている男。楽しいこと一番という性格を除けば、明るいし、義理堅いし、頭はいいしで、むしろその性格を除ければモテモテだろうと想像できる。昔本人に言つてみたが、「無理無理。この性格は直らないって。それに、俺はそこまでイケメンじゃないって。」と返された。

「俺の所には昨日の夜メールが来たぞ。」

「何ー? マジかー。どんな奴だ!」

俺が言つと、良は顔を思いつきり近づけてそう尋ねてきた。……

「どうでもいいが、顔が近い。

「ああ。グラッジって名前の人から

「グラッジ?名前からして男っぽいな。」

「でも、偽名だろ? 俺だつて だし」

ついでに言つと、元々は快という名前だから『カイ』にでもしようかと思ったが、『かい』で変換してみると、ギリシャ文字で『』があつたので、そつちにした。

「まあ、そうだけど、女性で『グラッジ』なんて付ける奴いるか? 好きな歌手とかそういうのなら分かるけど、そんな奴は聞いたことないしな。」

楽しいこと一番とこつことで、女性方面の雑誌などすら読む良が言つながら、ほとんど間違はないだろう。

「桜ちゃんも聞いたことないだろ?」

「..... そうですね。聞いたことがないですね.....。」

桜は少し考へると、そう答えた。そう答えたところでチャイムが鳴つてしまい、そこで会話は終了し、良も席へ戻った。担任が何か言つているが、聞き流す。そして重要なことではないだろう。朝の担任の報告を真面目に聞く奴など、桜や良以外にはいないだろう。な。むしろ、重要なのはこの後だ。この学校、特に進学校でもないどころか、授業自体、真面目にやる教師がないのに、始業式の次の日から通常授業がある。しかも、今日は金曜日で、明日からまた休みなのに授業があるなど、無駄過ぎる気がする。面倒なこと極まりない。

何気ない日常

「ふう。流石に久しぶりの授業はキツイな」
授業が終わると伸びをしながらそう言つ。特に誰かに言つたわけではないが、隣の席が桜なので、何かしらの返事はしてくれるだろう。

「そうですね。」

言葉ではそう言つているが、桜は笑つてそう言つし、本人にはほとんど疲れが見られない。まあ、桜の場合は体型を維持するための運動以外はほとんどしないし、そこまで疲れるようなことをしている記憶がないので、『疲れている』という状態自体を見たことがほとんどないんだが。

「どうか、なんでそんなにも平氣そうなんだ?」

「春休みにも勉強はしてましたので。」

「へへ。……とは言つても、春休みなんて短い休みに、宿題以外をやる物好きなんて、桜以外にいないだろ?」

「いいえ、そんなことはないですよ? 春休みにたまに図書室へ行っていましたけど、大抵、西又君がいましたから。」

「あ……アイツも例外だな。アイツはお前みたいに勉強したくてしてゐわけじゃないから。」

良の場合、昔から「とりあえず勉強ができれば、犯罪以外なら何やってもいい」と親から言われ続けていたらしく、結果として、学年主席を楽々維持し続ける頭脳の持ち主となつた。桜も努力しているのだが、今まで一度も良に勝てたことがない。とはいっても、良とはいつもギリギリ負けてるレベルだし、3位の人との差が大きい。中の中の成績の俺からしたら十分過ぎる

「それでも努力を続けられるのは凄いことだと思いますよ?」

まあ、確かにそうだ。俺だったら、そんなことぐらいじやあ動かない。そりゃあ、学年主席を取るたびに100万円やるとか言われ

れば別だが、基本、放任主義な両親なので（とこより、出張ばかりの両親との記憶より桜との記憶の方が多い気がする）、良のような条件では動く気にはならない。

「まあ、とにかく、俺には休日の勉強は無理ってことだ。」

桜は「そうですか」と言ひつと、「それでは帰りましょうか」と言い、立ち上がったので、俺も立ち上がった。

俺の家と桜の家は方角は同じだが、特別近いわけでもなければ、遠いわけでもない。まあ、歩いて5分ほどだろうが、住宅地なので当然だ。俺と桜は幼馴染だと思うし、周囲もそう言つてているので別に問題ないのだが、特に家が隣同士で子供の頃から兄妹のように育つた、なんてことはない。出会つたのが小学校入学前と言つ、早い時期だったでの、自然と一緒にいる時間が多かつただけだ。その頃から下校は一緒にしているので、今日も一緒だ。登校の方は小学校の頃からだつたはずだけど、なぜかは覚えてない。別にビリでもいいだろ？

俺は家に帰ると、さっそくパソコンを起動した。相手がどこの誰だかは分からぬけど、もしメールが着ているなら早めに返した方がいいだろ？と思つたからだ。……まあ、そんなマメなことをやるのも最初の内だけだろう。そう思いメールを確認してみると、メールが1つ来ていた。

T O F r o m グラシジ

確かに、春は出会いの季節だと思う。……でも、出会いがいいものかは分からぬ。出会いわなければよかつた出会いもある。重要なのは、出会いつて、どう発展させるかだと思つ。だから自分は、出会いを探す前に、今までのことを振り返つてみたい。

……内容はとりあえず理解できるが、まさかそんな返事が来るとは思つていなかつた。他人がどういう考え方を持とうが、興味はないけれど『春は出会いの季節』なんて言つたのは良で、ただ単純にメールを書くときに思い出したから書いただけだ。俺自身は、このあとに簡単な自己紹介でもするのかと思ったけど、相手はそうは思つ

てないみたいだ。……さて、どう返せばいいのだろうか？急に話題を変更させるわけにもいかないし、かといって俺は春にそこまで関心があるわけではない。過去を振り返る気もないし、これから先の未来……例えば明日にでも、可愛い転校生が来る展開などを想像しても仕方ないとと思う。第一、転校生が来たとして、俺の人生にはほとんど関わらないと思う。桜と一緒に「転校生なんて珍しいな」とか言つたりして、少し話題にするだけで、すぐにどうでもよくなると思う。だから、自然と返信する内容なんて、適当に共感した振りをするか、反対の意見を書くしかないと思う。

俺は心中で『春は出会いの季節』なんてことを言つた良を恨みながら、メールの新規作成ボタンを押して、文章を書き始めた。

To グラッジ From

確かに、出会わなければよかつたと思つ出会い系もあつたけれど、自分はそこまで悪い出会い系がなかつたせいか、やはり出会い系が欲しいと思う。悪い出会い系も良い出会い系も、出会い系がなければ起こらないことだから、それが良い出会い系であることを信じて、出会い系を待ちたい

パソコンにそう入力し終え、送信ボタンを押した。一応、俺の本心を書いたけれど、果たしてこれでよかつたのかは分からぬ。別に気軽にメールする感じでいいのだろうけど、なにぶん、相手がどんな人か分からぬので、どう書けばいいのが分からぬ。良や桜相手の方がどれだけ楽かがよく分かる。さつきも考えたことと同じだけれど、俺は別に本氣で出会い系が欲しいわけじゃない。今ま、適当に高校生活をして、もしかしたら良や桜とは違う大学かもしれないけど、とりあえず大学に行つて、就職。飛び切り良い人じやなくても、悪くない人と結婚して、子供を作る。そしてゆっくり老衰。そんな感じの人生でいいと思ってる。むしろその方がいい。死ぬまで特に大きな変化のない生活でいいと思っている。悔やむ過去も無く、未来に希望を持つでもない、平凡な人生。初めのメールであんなことを書かなければ、おそらく、さつきのメールでも、『

出会いなんて興味ない』と書いたと思う。俺は時計を確認し、とりあえずの寝る時間を決め、ゲームを始めた。

始まりのメール～警告～

起きると畳前だった。まだ春休みのダラダラした生活が抜けないのか、目覚ましをセットしていなかつたからなのか、昨日寝たのはまだ早い時間だったのに、畠まで寝てしまつた。別に用事などはないし、親もいないのでいつまで寝ていても問題はないのだけ……流石に畠までというのはどうかと思う。

俺はベットから出てカーテンを開けた。外は当然のように明るくて、結構暖かい。再びカーテンを閉め、せっせと着替えて、カーテンをもう一度開け、下に降りる。昨日は朝、畠はもちもん、夜さえも食べなかつたので、今なら少しは食べられると思つ。

1階に降りると、当然のように誰もいない。両親が出張に出始めたころは違和感があつたけど、流石に慣れている。むしろ、もしかしたら、両親が帰ってきて、両親がいる方が違和感を感じるかもしない。

俺は冷蔵庫を開け、中を確認してみた。パツと見た感じ、すぐに食べられるのがイチゴ、ヨーグルト、チーズ、ワインナー。生でいいなら野菜。調理が必要なのが魚と肉。ご飯は炊いておいた記憶はない……といふか、使い方が分からないので、あるわけがない。冷蔵庫を閉めて、戸棚を開けると、ツナの缶詰が一つ。

……どうしよう。そこまで食べる気はしないとはい、流石に駄目な気がする。空腹自体は問題ないのだが、ヨーグルトやチーズでは、『食べた気分』というのが満たされない。俺にとつて重要なのは、『食べた』という満足感だからな。結局は『もう食べられない』という状態までは食べれないのだから、食べたという気分だけは持ちたい。……と、なれば一番いいのは魚か肉。……だが、俺に調理はできない。桜を呼ぶという手もあるけど、それは避けたい。こんなことで呼ぶのはどうかと思うし、向こうも迷惑だろ？

仕方ないのでツナの缶詰を取り出し、チーズとワインナーも一緒

に食べた。食べ終わると缶詰などの後始末をして、財布を持って外出した。夜はいらないにしても、明日の朝はたぶん、腹が減つているだろうから何か買っておかないとまずい。選択としては弁当かパン。せつき肉か魚を食べたいと思つていたためか、異様に何か食べたい。まあ、何かと言えば肉を食べたいんだけど。

歩いて10分ほどの所にあるコンビニに入ると、意外な人物を見つけた。

「よお、良じやないか。何してるんだ？」

雑誌売り場で立ち読みをしていた良に近づきながら、声をかけた。「おお、快か。お前」」やどうしたんだ？お前がコンビニに来るなんて珍しいじゃないか。」

確かにそうだ。普段から料理は親か桜がやる（ほとんどの場合が桜だけ）ため、出かけること自体が珍しい。例え出かけることがあつたとしても、それは桜と一緒にというのが多い。主な理由……というか、一緒に出かける理由の100%が荷物持ちだけど。まあ、その食材の5割ほどは俺の家の冷蔵庫に入るので、文句は言わないけど。

「俺は明日の朝……いや、昼かもしれないし、夜かもしれないけど、とりあえず明日の飯を買いに来た。」

「ん？お前の両親が出張中というのは聞いたが、桜ちゃんが作ってくれるんじゃないのか？」

確かに、あの甲斐甲斐しい幼馴染は、春休みの間も毎日飯を用意してくれた。朝来て、いつでも暖めれば食べられる物を作り、冷蔵庫に入れていた。だから、春休み中、俺は外でなくて済んでいたのだ。……まあ、結果としてそれはいいのか悪いのかは分からないけどな。

「今日は来なかつたんだよ。起きたのもつゝせつきで、食べたものもツナ缶1つにヨーグルトとチーズだけ。明日はそんなことがないようにと思ってな。」

「どうか、1日をそれだけで生きていくのか？」

良が不思議そうに見てくるが、俺は平然と頷く。確かに、常人ならちょっと無理だろうけど、俺にとつて常人の『腹が減った』というレベルはまだまだ大丈夫なレベルなのだ。ろくに食べる物がない生活をしている人にとっての『餓死する』より少し前のレベル辺りじゃないと、俺にとつての腹が減ったにはならないのだ。そりゃあ、昔は常人の『腹が減った』で何度も食べようとしていたけど、そのたびに吐くので、今ではもうその感覚すらなくなつた。食べられる状態になつても『あ、そろそろ食べないと』というような感じしかしない。昔はその感覚が分からなくて倒れたこともあった。

「で、お前こそ何してんだ？ 雑誌の立ち読みなんて珍しいんじゃないか？」

聞いた話だけど、コイツはチェックすべき雑誌は全て買っているらしいので、立ち読みなんてすることは思えない。……まあ、買うという時点で、こいつの所持金と毎月の小遣いがいつたいいくらのかとかが気になるけど。

「別に大した理由はないんだが、ちょっと妹がこの雑誌の話をしていてな。」

「へ～、妹がいたんだ。」

「コイツの妹と聞くと、どうしても変なイメージしか出てこない。なんというか……顔立ちとかは真面目そうで、成績はいいのに、天真爛漫な女の子。良自身、最低限の身だしなみは気にするらしいが、家では髪を梳かすなどしないらしいので、妹の方もボサボサの髪で……うん、切るのも面倒だからという理由で凄く長い髪とかしてそう。身長以上の長さがあつて、学校に行くときは括つたりして誤魔化してそう。

そんな俺の想像を知るはずもない良は、その先を説明してきた。

「妹の年代……俺たちより2年下なんだが、その年代でこの雑誌が流行っているらしい。」

良がそういう、こちらに見せた雑誌を見せてみると、単なる女性用のファッション雑誌だった。

「あれ？ 前に良が話してた方は流行ってないのか？」

俺は前に良が話していた雑誌を記憶を頼りに探し、取つてみた。

「ああ、そいうらしいんだ。なんでも、そっちの雑誌よりこっちの雑誌の方が服が可愛いだとか。」

「へ～。」

俺は良から雑誌を借りて2つを見比べてみたが……全く分からぬい。どっちも同じような気がする。そりやあ、微妙な差はあるけど、どっちも可愛い気がするし、正直、どっちでもいい気がする。

「良は……分かるのか？ この差が。」

「いや、認めるのは少し癪だが、分からぬ。」

「そうか。」

今まで、いろいろな雑誌を読んできた良が分からぬといふのは意外だが、それだけに、この雑誌の感覚は女性特有なのだというのが分かる。

「まさか俺に理解できない感覚があるとはな。世界は広い。」

高校2年生の時に痛感するものとしてはどつかと思つのはさておき、とりあえず俺はもう話すことはないので、弁当を買い、良に別れを言つて、コンビニを出た。

この辺りには特に娛樂はない。少なくとも、電車に乗らないとゲームセンターなんてものはないし、本屋すらない。電車に乗らずに行ける場所といえば学校かコンビニかスーパーぐらいなものだ。それでも日常生活には困らないので、滅多に電車に乗つたりしない。俺はさつさと家に帰り、冷蔵庫の中に弁当を入れた。賞味期限は明後日なので、明日、万が一桜が来て飯を作つてくれたとしても、明後日の夜にでも食べればいいだろう。

俺は2階へ上がり、パソコンを付けた。昨日メールしたのが夜なので、たぶんメールが来ていると思つたからだ。

To From グラッジ

自分にはよかつた出会いなんてなかつた。出会つた人、ほぼ全員が殺したい人だつた。友達は勿論、両親さえ、なぜ自分を産んだの

かと恨んだ。だから、出会いを探す前に、定期的に過去を振り返り、自業自得だと思わない、誰かを殺しそうだった。

俺は内容を読んで驚いた。……だけど、すぐにその驚きはなくな

つた。ネット上などでは、結構こういうことがあるということを知っていたからだ。日常生活では口に出せない欲求、不満、怒り、嫉妬。でも、ネット上では簡単に出せる。俺は楽観的に考え、とりあえず慰め……というより、なだめの文を書こうと新規作成ボタンを押そうとして気づいた。もう一つ、メールが着ていた。現在、俺のこのメールアドレスを知っているのはグラッジ一人のはず。なぜこちらが返信する前に送ったのだろうと不思議に思いながら、そのメールを開いた

TO From NO NAME

今、私は貴方とグラッジが2日まえ、の夜に始めて貴方にメールをしたことしか知らない人、グラッジは明日から人を殺す。が、回数は6回つ、いに最後に死ぬのは快誰か止めてこ、のは人を殺、人す、る。本、當に天、に祈る、お、父、さんお母さん救、つて。病、院、院、へ来てさ、あす、ぐに。人、べ、ル、

そんな文が書かれていた。……正直、意味が分からない。なんなのだろう、このメールは。差出人は『NO NAME』。つまり未登録。グラッジではない。間違いメールということはないだろう。文の中に『グラッジ』という人物の名前があることから、少なくともグラッジと知り合い。更に、俺の名前さえ出ている。……これは誰なんだ？それに、変な文の区切り方。今じゃあ使われてるのか分からぬよな、『の前か後を繋げると正しい文になる古い暗号かと思つたけど、紙に書いて試してみても』今えがつこ殺す本天るお父救病院さあすヘル』か『私の回いの人る当にお父さつ院へあぐル』になって、おかしい。じゃあ、この区切りはなんだ？途中から文がおかしいことからも、明らかに無理矢理何かメッセージを作るために繋げたとしか思えないのに。……まあ、考えても仕方がない。どうせ俺には関係ないだろう。俺の名前が出ているけど、

変換ミスか何かだろ？」、グラッジの弟か妹が悪戯で送ったのだろう。

俺は適当に前の文の返事を書き、メールを送った後、適当にパソコン用のゲームをやったり、宿題をやったりして時間を潰した。

始まりのメール～予告～

起きたときにはまた毎前だった。昨夜、ムキになつてマイインスイーパーの中級のタイムを縮めようと、4時ぐらいまでやつていたのが駄目だったのだろう。

俺は起き上がり、着替えて下に降りた。下は昨日と同じように静かで、冷蔵庫の中には昨日買つておいた弁当があるだけだった。もしかしたら、桜は一度来たのかもしれないけど、冷蔵庫に弁当があるのを見て、飯を作るのをやめたのかもしれない。アイツ、来ても絶対に起こしてくれないからなあ。

俺はレンジで弁当を適当に温めて食べた。

……さて、これからどうしようか。明日の飯……は、とりあえず桜が作ってくれると思う。だから、コンビニに弁当を買いに行く必要はない。

……仕方ない。メールでもチェックして、またゲームでもするか。一応、冗談だとは思うけど、昨日のグラッジのメールも気になるしそう決めて立ち上がり、2階へ上がつた。メール画面を開いてみると、予想通りにメールが1つ來ていた。

TO From グラッジ

始まるのは6時。1日1回。最後の6回目に貴方。

最初は地獄の炎が身を焼き、その体は一度と動くことはなくなる。自らが招いた炎によつて、灰になる。

次は連續殺人、殺すのは10人。残すのは10の跡。近くじゃないけど近くにいる人。知らないけど知つている人。さあさあ次に死ぬのは10人。

3つ目。後ろめたいことがないならば、前を見て歩け。もし非があると思うなら、その頭を下げ過去を悔い改め、罪を償え。

4つ目。泥棒は物を盗むだけ。強盗はもっと大切なものを取つつく。まあ氣をつけて、今度は死神が貴方の命を取りに来るよ

5つ目だ。ゴールは近い。早く見つけてご覧。奪う命はあと2つ。次
は裏切り者、連帶者。お金は大切。でも、絶対のものではない。お
金に眩んだその日はいらない日

最後に貴方。永遠に感じられる日も終わりが来る。さあ、貴方の元
へ参ります

それだけだった。ただ、なんとなく予想できることは、本当に人
を殺すつもりなら6時に行い、最初の殺し方は焼いて殺す。そして
2回目には10人死ぬ。そして最後には俺……だと思う。分かるの
はそれぐらいなもの。……でも、もし本当に殺すつもりなら、なぜ
こんなメールを送るのだろうか？漫画とかアニメで予告状を出す怪
盗や殺し屋がいるが、そんなのは話を面白くするためにするだけ。
実際にそんなことをしても、メリツトは何もないはず……。
あ、單なる冗談にそこまで真剣に考えても仕方ない。

そう結論して、メール画面を閉じ、ゲームを起動した。メールの
返信を忘れていたことを途中で思い出したが、正直、どうでもよく
なっていた。

始まり

「……………朝か。」

アラームの音で目が覚め、時間を確認すると、当然のようにセツトした時間が目に入った。今日からまた学校なので、起きなことマズイ。俺は体を起こし、制服に着替えて下に降りた。

「……………あれ？ 桜は来てないんだ。」

1階がやけに静かだと思ったけど、まさか桜が来てないとは思わなかつた。桜が来ない日なんて、日直で行くのが早い日ぐらいだし、それでも前日にはちゃんと書つのに……。

ちょっとと考えたけど、特に理由が分からなかつたので、仕方ないので考えるのはあきらめた。どうせ学校へ行けば会えるだろう。学校に着くと、自分の席へ向かいながら、桜の姿を探した。自分の隣の桜の席。そこからグルッと教室内。しかし、どこにも桜の姿はなかつた。すると、席にカバンを置くと同時に、「良が話しかけてきた。」

「よう。桜ちゃんは？」

「いや、知らん。まだ来てないのか？」

まだ来てないとなると、考えられる原因は……風邪……かな？でも、アイツの場合、食生活とか生活リズムがいいせいなのかもしれないが、そういうことは滅多にならない。

「快…………お前…………何か怒らせるとか言つたんじゃないか？」良が俺を呆れるように見てくるが、その可能性はないと思つ。金曜日の時に話した内容なんて、特になんでもない世間話だし、別れるときも普通だつた。まあ、体調が悪いのだろう。滅多にないとはいって、あくまでも『滅多にない』だからな。

良にそう言つと、良も納得したのか、「そうだな」と頷いた。

「……………やっぱ、昨日の火事だけどな。」

「火事？」

昨日、火事などあつたのだろうか？昨日はそこまで早く寝た気はしないんだが……。深夜に起きたのか？

「知らないのか？……あー、いや、すまん。そういえば、お前の場合、眠りが深いからな。一度寝たらなかなか起きなかつたな。」

良の言葉に、若干イラッとするが、事実なのでしょうがない。桜が俺を起こさないのもそれが原因だし。

「で？ そういうからには深夜に起きたんだよな？」

「ん？ ああ。深夜も深夜。3時頃だつたかな。」

「そんな時間になんて火事が起きるんだよ。放火か？」
自分で言つておいてなんだが、それはないかとも思つた。ここ数年、事件らしい事件など、ここいらで聞いたことがない。火事など、俺が小学校の時以来だ。

「いや、たんなるタバコの火の不始末らしい。」

「へ～。で、その話がどうしたんだ？」

「いや。この火事なんだが、事故とテレビでも新聞でも言われてるんだが、どうもそんな気がしなくてな。」

「どうということだ？」

「まず、その家の主は一応、35歳の独身男性らしいんだ。」

「一応って？」

「ほとんど本人と分からぬほど体が焼けていたらしい。残った部分と、その家を買った人などを調べて判明したらしい。それでも、正直、『おそらく』といつレベルでの確証なほど焼けていたらしい。

「ふうん。どうやって身元を判明させるのかは知らないけど、そんなにも焼けてるなんて、ある意味凄いな。…………ん？ でも、それでなんで事故じゃないと思うんだ？」

「周りの家に、一切被害がなかつたからだ。」

「でも、そんなことつて普通にあるんじゃないのか？ 人は中に入っているんだから。」

「ああ。だけど、被害がないということは、それだけ早く火は治まつたということだ。それだけの間に、そこまで焼けるには、そもそも本人に火を付ける以外、不可能だと思うんだ。」

「うん……。」

確かに良の言いたいことは分かる。その家がどれだけ大きいかは分からぬし、発火場所も分からぬけど、少なくとも、火事になつていれば普通の人は寝ていても気がつく。おそらく、俺でも自分の家が燃えていれば気づくだろう。35歳ということを考えれば、むしろ窓を破つてでも逃げられたと思う。そう考えれば、確かに事故としてはおかしい。とはいっても、起こってるものは起こつてるので考えないといけない。35歳なんだから、酒を飲んでいたとかが考えられるし、持病を持っていたとも考えられる。他にも足を骨折していたとかでもいい。いくらでも可能性はある。

「まあ、こう言つたら死んだ人が可哀想だけど、俺たちが考えてもどうにもならないって。俺たちは探偵でもなんでもないんだから。」

俺がそう言つと、未だに悩んでいた良も「そうだな」とだけいい、席に戻つた。

俺はカバンの中を机に入れながら、桜のことを考えた。俺にとっては火事より桜の方が大事だ。

金曜日は特に何もなかつたはずだから、土曜日……は、確かに起きて、昼にちょっと食べてそのままコンビニに行つて、良と話しただけ。桜の性格的に、朝起きなかつたからとかいう親的な怒りはないと言えば、あとは部屋でダラダラ過ごしていただけだ。日曜日も昼に起きて、特に出かけるでもなく、パソコンをして……あれ? 何かが引っかかる。なんだろう? ……? 何かが引っかかる。なんだろう? ……?

気になつて、ずっと考えたけど、結局は答えは分からなかつた。

違和感

昼休みになると、俺は桜の家に電話してみた。

『プルルル！プルルル！プルルル！』

「……あれ？」

しかし、誰も受話器を取りらずに、そのまま留守番電話になつてしまつた。確かに、桜の父親は何をしているかは知らないけど、内職（それでも十分収入がいいらしい）なうえに、母親は専業主婦。桜は体調が悪いのかどうかは分からないうが、眞面目な桜が学校に来ないという事態なのだから、両親のどちらかが出かけるのであっても、どちらかが残るだろう。あの両親は桜を凄く可愛がつてるので、桜を置いて出かけることなど、月に一度のデートの日ぐらいだし……（それはそれで問題がある気がするけど）。可能性としては両親も桜も出かけているパターンだけど、これも可能性は低いかな。知り合いの葬式とかが急に入ったなら分かるけど、それならそれで俺に連絡ぐらい入れるだろう。…………さて、どうしたものか。とりあえず帰りに桜の家によつ……

『ブゥーン！ブゥーン！ブゥーン！』

突然、携帯が振動し始めた。マナーモードの解除がいちいち面倒なので、当然といえば当然なんだが。

ディスプレイで番号を確認してみると、ついさっき電話したばかりの桜の家の電話番号だった。俺はすぐに携帯を開いた。

「もしもし、桜か？」

番号は桜の家だったので、桜の両親という可能性もあつたが、そもそも桜の両親は俺の番号を知らない。もしかしたら、体調が悪い桜に代わって掛けてきた可能性もあるけど、桜の両親と電話で話したことなどないせいか（というか、桜や良以外と電話で話したことほとんどない）自然と桜と考えて対応してしまった。

『もしもし。私だよ。』

しかし、予想通り相手は桜だった。

「ああ。どうしたんだ？さつき電話したけど、出なかつたじゃないか。」

『あ、『めんね。ちょっと忙しくて、出られなかつたの。』

……あれ？また何か違和感が……。さつき、昨日のことを考えてたときにも何か引っかかつたけど、今度はまた、別のことで引っかかるような……。

「そ、そうか。で、どうしたんだ？」

『どうしたつて？』

「いや。今日、学校に来てないから、体調でも悪いのかと思って。」

『あ、うん。『めんね。ちょっと体調が悪くて。』

何か……何かが引っかかる。昨日のことで引っかかつたのは一瞬だけど、今はずっと引っかかってる感じだ。声は明らかに桜のもの……だと思う。電話越しだから確信を持つて言える訳じゃがないけど、桜だと思う。というか、今回は向こうから電話をかけてきたのだから、桜のフリをする理由がない。

「そうか。じゃあ仕方ないな。早く元気になれよ。」

いくら考へても答えは分からないので、俺はさつさと会話を終わらせようとした。考へ事に集中し過ぎて、体調が悪い桜に気を使わせたら悪いからな。

『うん。じゃあ、またね。』

『おう。…………ふう。』

向こうが電話を切る音がした後、俺の方も電話を切り、一息ついた。桜がとりあえずは元気だつたという安心感と、電話中に引っかつた違和感からの疲れがきた。なんで桜との電話でこんなにも疲れないといけないのかと思うけど、桜に当たつても仕方ない。

俺は考へ事をさっさと切り上げて、良の待つている教室へ戻った。アイツも桜のことを心配していたので、一応、元気だったことは報告しないとな。

「おお、快。桜ちゃん、どうだった？」

「元気そうだつたぞ。あれなら、明日は来るんじゃないかな？」

「そうか。それはよかつた。」

その後は、黙々と昼飯を食べた。基本的に何でも話せる良だが、それゆえに話を振ると深いところまで話せてしまうので、話を振るときは注意しないと、こっちがついていけなくなる（本人も自覚してはいるらしい）。だから、自然と良と付き合つ奴はあまり自分から良に話を振らない。それは俺も例外じゃないけど、それでも一緒に食べるのは、ただ単に俺に友達が少ないので、沈黙が苦痛じやないことや、フツと浮かんだ何でもない話でも、いやんと付き合つてくれるからだろう。

逃避

「じゃあ、俺は帰るぞ。」

帰りのHRが終わり、桜の様子を見に行くか行かないかを迷つていると、良は俺にそう告げて、さっさと帰つていった。まあ、良は桜や俺の家とは反対方向だから、お見舞いに行こうにも、結構な遠回りになるからな。桜が元気だと分かつた今、様子を行く必要もない。

……でだ。結局は行くか行かないか。電話越しでは、結構元気そうだったけど、俺に心配させないために元気そうに振舞つてたという可能性もある。でも、それならそれでお見舞いに行つて元気じゃないところを見られる方が桜は嫌だろう。しかし、俺としては桜の状態は知つておきたい。これで見に行かずに、明日桜がこなかつたら心配で心配で胃に穴が開きかねん。

そう決めた俺は、立ち上がり、教室を出た。とりあえず、お見舞いの品を買っていく……にはスーパーは逆方向なので、一旦家に帰つて、冷蔵庫にあつたと思うイチゴを持つて、桜の様子を見に行こう。

俺はさつむと歩き、校門を出て家に向かつた。家に帰ると冷蔵庫にイチゴがあることを確認して、一応、今からお見舞いに行くと連絡しようと思い、桜の家に電話してみた。

ブルルル！ブルルル！ブルル、ガチャ

『もしもし？』

今度は昼のように切れることなく、桜が電話を取つた

「あ、桜か？快だ

『あれ？どうしたの？』

うーん……やっぱり違和感がある。なんだろう？

『もしもし？』

「あ、すまんすまん

今考えるのはやめとくが。今の桜にあまり心配をかけるわけにもいかないし。

『それで、どうしたの？』

「いや、これからお見舞いに行こうと思つてな。行つても大丈夫か？」

『え！？ 今から…？』

桜の声は俺の予想に反して、なぜだか驚いた……。とこりより、都合が悪いような声だつた。

「どうした？ 駄目か？」

『駄目…… つてわけじゃ ないけど……』

妙に歯切れが悪いな。普段なら良いか悪いかははつきり言つたのに……。そりやあ、付き合いが長くとも、桜も女の子なんだから、風邪の時に来られる原因はいくつか思いつくが、それを考へても、なぜそんな反応になるのかが分からぬ。もしかして、年頃の女性の感覚つて俺が思うより繊細なのかな？

「いや、駄目なら駄目って言つてくれ。俺はただ、桜のことが心配だつただけだから。」

『あ、そなんだ。ありがと。でも、私は元気だよ？』

「お前の場合、我慢することだつてありえるだろ。」

『もう。そんなことないつて。』

「そうか？」

『うん。心配してくれてありがと。』

「じゃあ、明日は絶対に来いよ？』

『うん、分かつた。』

俺はその言葉を聞くと電話を切り、一息ついた。まだ嘘を付いていたという可能性もあつたけど、そこまではつこく聞いたので、その可能性もほとんどないと黙つていいただろ。もし明日また休んだら、今度こそ無理矢理押しかければいい。

俺はそう心に決め、自室へ荷物を持って上がつた。宿題があるが、とりあえずパソコンをつけると、インターネットに朝に良が黙つて

いた火事が大きく出ていた。簡単に読んでみたが、良が言っていたことと変わらなかつた。ただ、最後に、良が言つたように『明らかに焼け方がおかしい』と書かれていた。俺は良に感心しながら、メール画面を開いた。特に新着メールはなかつたが、開いた瞬間、良から話を聞いた時に感じた違和感に気がついた。昨日のグラッジからのメール

『始まるのは6時。1日1回。最後の6回目に貴方。最初は地獄の炎が身を焼き、その体は一度と動くことはなくなる。自らが招いた炎によつて、灰になる』

事件が起きたのは3時。書いてある時間より9時間も後だ。……でも、文章は確かに焼けて死ぬと書いてある。単なる偶然……にしてはタイミングがいい氣がする。例えば、6時に始まるというの俺を騙す嘘という可能性もある。他にも犯人は別にいるけれど、何らかのことでの犯行が起こるのが6時だと知つた。けど、相手の事情で時間が変わつてしまつたとか……。もしくは、グラッジ本人が犯人だけ、グラッジの事情が変わつた可能性もある。それとも、やはりただの偶然か……。

「ああ！くそつ！」

俺は頭を思いっきり搔き、髪をグシャグシャにした。昔からイライラするとそうしてしまう癖がある。やめようと思つても、やはりやつてしまつ。……とにかく、考へてもきりがない。もう考えるのは諦めて、偶然ということにしよう。もし偶然じゃなかつた場合、あと4回殺人が起こつたあと俺は殺されるらしいが、今の時代、そういう簡単に人が殺されるということ自体がおかしい。俺も両親も特に偉い人じやないし、知り合いにもいない。だから、狙われる理由もない。だから、これは單なる偶然だ！

そう決め付けて、俺はゲームに没頭することにした

第2の犯行

今朝は田覚ましが鳴る前に起きたうえに、寝起きもよかつた。俺はいつも通りに着替え、下へ降りた。下へ降りてきたが、今日もまた、桜はいなかつた。まあ、おそらく、風邪が直つたばかりだから、念のため来なかつたのだろう。もしこれで学校にいなかつたら、今日こそ本当に家に押しかけるしかないな。俺は荷物を玄関に用意して、自室で漫画を読み、ちゅうどいいうらじの時間になると、家を出た。

昨日と同じように1人で通学路を歩くが、やはり違和感がある。まあ、それも今までだらうとその新鮮な気分を味わいながら歩いた。

学校に着くと、妙に学校内が騒がしかつた。

「ねえ、聞いた？ 昨日の事件」「昨日の夜、校舎やグラウンドにあつた不思議な液体の跡だろ？」「そうそう。先生たちも、初めは理科の先生が何かの薬品を落としたんだろうって言つてたけど、昨日の放課後は理科の先生、夜残つてなかつたらしいよ？」「俺が聞いた噂によると、あれ、血らしいぜ？」「うそー！ なんで学校にそんな跡があるのよ。」「知らねえよ。それがあくまで噂だよ。」

歩いてるだけで聞こえる内容でも、物騒なワードが聞こえる。こういうときは、さつさと教室に向かうべきだな。悪い内容にしり、単なる勘違いにしろ、良なら情報が早いだらうし、良自身の考えが聞けるからな。

教室に入ると、すぐに良がやつてきた。

「学校中騒いでるから知ってると思うけど、朝、校舎やグラウンドに血の跡があつたんだ。」

なんとなくそりぢやないかと思つていたが、良が断言するとは思わなかつた。

「なんで血だつて分かるんだ？」

「第一発見者が俺だからだ。」

良は普段から学校に来るのが早くて、いつも教室で予習をしている。だから、その跡も発見できたのだろう。

「でも、なんで血なんて分かつたんだ？」

「当たり前だろ？ いくらなんでも、学校内に血と間違えるような液体は置いてない。少し見れば分かる。」

確かにそうだ。実際、どのくらいの跡かは分からないが、血の跡なら普通は分かる。

「……で、なんの血かは分かつたのか？ 誰か死んだのか？」

一瞬、思いついたのが桜。桜はまだ来ていない。風邪おぜじやくだから、来るのが多少遅いかもしれないし、やはり悪化して家にいるのかもしないが、それでも心配だ。

「まだ分かつてないけど、俺が見つけただけでも5箇所、血の跡があつたんだ。もしかしたら他にもあつたのかもしれないし、5箇所に血の跡があつたからといって、被害者が5人とは限らない。」

良も桜を思い浮かべたのか、少し落ち着きがなかつた。だけど、逆に俺は落ち着いていた。昨日とは違い、すぐに思いついた

「もしかしたら、血の跡は10箇所あるのかもしれない。」

「……どういうことだ？」

落ち着かずにはづく眩いでいた良だが、俺がそう言つと、瞬間、怖い目つきになつて俺を見た。

「前に、グラッジという人とメールをしているって言つただろ？」

「ああ。あの文通か。まだ続いてるのか？」

「いや、続いてるって言つかは分からぬけど、最後のメールに気になることが書かれてるんだ。」

「気になること？」

説明するより見せたほうが早いと思い、携帯を取り出して、パソコンのメールボックスを開いて、そのメールを見せた。

To From グラッジ

始まるのは6時。1日1回。最後の6回目に貴方。

最初は地獄の炎が身を焼き、その体は一度と動くことはなくなる。自らが招いた炎によつて、灰になる。

次は連續殺人、殺すのは10人。残すのは10の跡。近くじゃないけど近くにいる人。知らないけど知っている人。さあさあ次に死ぬのは10人。

3つ目。後ろめたいことがないならば、前を見て歩け。もし非があると思うなら、その頭を下げ過去を悔い改め、罪を償え。

4つ目。泥棒は物を盗むだけ。強盗はもつと大切なものを取つていく。まあ気をつけて、今度は死神が貴方の命を取りに来るよ
5つ目だ。ゴールは近い。早く見つけてご覧。奪う命はあと2つ。次は裏切り者。お金は大切。でも、絶対のものではない。お金に眩んだその目はいらぬ目

最後に貴方。永遠に感じられる日も終わりが来る。さあ、貴方の元へ参ります

確信はもてないけど、おそらく間違いない。

『近くじゃないけど近くにいる人。知らないけど知っている人。』

学校の人なら、近いとも近くないとも言える。それに知つていても知つていないとも言える。

「昨日の火事も時間はともかく、内容は一致してゐる。」

「……確かにそうだけど、問題は快の言つように時間だ。今回は分からぬけど、昨日の火事は深夜3時だ。9時間の差がある。」

良も俺と同じ考え方のようで、悩んでいる。もしこの内容が本当なら、明日にはまた誰かが死ぬ。次は今までのように分かりやすくて書いてないが、何か後ろめたいことがある人。つまり、何か犯罪を犯した人だと思う。

「良。次のことを考える前に、まず今回と前回のことを考えよう。」

次のことを考えていると顔に出ていたのか、良はそう言い、一文指差しながら確かめた。

「まず昨日の火事。時間は置いておくとして『地獄の炎が身を焼き、その体は一度と動くことはなくなる』。」

「これはそのままの意味で、丸焦げになつて発見されただろ?」

「ああ。次は『自らが招いた炎によつて、灰になる』。」

「これは……灰とまではいかなくても、誰か分からぬほどに焼けてたんだろ?」

「ああ。じゃあ、一つ目は正しいってことか。」

もう既にこの時点で、俺も良もこの文が全てこれから起ることなどということをなんとなく予感している。でも、そうでなくて欲しいと思いながら、次を確かめる。

「『続殺人、殺すのは10人。残すのは10の跡。近くじゃないけど近くにいる人。知らないけど知っている人。さあさあ次に死ぬのは10人』。」

「まだ10人死んだかは分からないし、血の跡も分かつるので5箇所だな。」

「……つまり、これで残り5箇所が見つかって、死んだのも10人だと分かつたら……」

良は最後まで口にしなかつたが、お互に分かつている。……いや、この結果が出る以前に、今の時点での文が本物だと分かつている。

「じゃあ、次は今日のやつか。」

「ああ、そうだな。」

「『後ろめたいことがないならば、前を見て歩け。もし非があると思つなら、その頭を下げ過去を悔い改め、罪を償え』。」

「良……意味、分かるか?」

「よくは分からぬけど、おそらく、犯罪を犯した人だ。でも、捕まつていらない人だな。」

「なんで捕まつてない人なんだ?」

途中までは俺と同じだったが、良は『捕まつてない人』と断言した。

「グラッジ自身も、わざわざ刑務所に入つて殺すわけがないから、対象が犯罪者だと仮定すると、まだ捕まつてないか、釈放されたかだ。だけど、文の後半に『過去を悔い改め、償え』て書いてある。釈放されたからといって悔い改めてるとは限らないが、償えつてことはまだ償つてないって事だ。だから、たぶん捕まつてない人だ。」

「なら、余計に探すのは無理じゃないか。」

まだその犯行を止めると決めたわけじゃないが、誰かが死ぬと分かつてゐるのに、みすみす見逃すようなことはしたくない。でも、警察でも捜しきれていない人を探すことなんてできるわけがない。

「いや、そつとは限らない。例え犯罪を犯していても、犯罪が起つたことを知られていなければ捕まることはない。」

良のいうことはもつともだ。……でも

「なら、なんでグラッジはそいつが犯罪を犯したことを見つけているんだ？」

「それは……」

良もそれを考えていいなかつたのか、すぐには答えられず、考え込む。可能性としては、対象が犯罪者ではないということだけ、他に考えられない。ここまでストレートに書かれていたのに対しても、いきなり趣向を凝らした文にするとは思えない。

キーン！ コーン！ カーン！ コーン！

しかし、そこでチャイムが鳴つてしまい、考えは中断させるしかなくなつてしまつた。

……けど、それはちょうどよかつたかもしれない。今は考えることが多くて、頭がいっぱいだ。桜は無事なのか？ グラッジの目的は？ 殺されるとしたら次に殺されるのは誰？

頭の中で考えるが、余計分からなくなる。先生が何か言つているが、それも右から左に抜けていく

「え～、皆も知つてゐると思うが、この学校の至る所に血の跡があつた。」

たまたま聞こえた先生のその言葉に、クラスの人は

「あ、やっぱり血の跡だつたんだ」「ねえねえ。じゃあ誰か死んだの?」「いや、死んだとは限らねえだろ」「でも、怪我はしたつてことでしょ?」「案外、動物の血かもよ?」

皆、好き勝手に喋りだした。俺としても、動物の血であつてほしいし、例え人のものだつたとしても、怪我で済んでいてほしい。

「血については警察の方が調べてくれているが、とりあえず、念のために今日の欠席の家庭には連絡するように職員会議で決まった。今日の欠席は……天野と増田か。誰かすぐに連絡が取れる人はいるか?」

俺はすかさず手を挙げた。桜は携帯を持つていないので、直接家に電話をかけることになるが、とにかく一刻も早く無事を確認したかった。

「じゃあ深峰。天野にはお前が連絡を取れ。他のクラスもホームルーム中だから、あまり大きな声で話すなよ。」

俺は先生の注意を聞き流しながら、早足で廊下に出て、携帯の電話帳から桜の家の電話番号を見つけ、ボタンを押した

プルルルル！プルルルル！プルルルル！

……でない。いくら待つても、誰も出なかつた。時間を見てみると、携帯電話の時計は8時45分と表示されている。この時間なら、少なくとも両親のどちらかは起きているはずだ。なのに、なぜ誰も出ないんだ?

ついには留守番電話の声が聞こえてきて、焦りが増す。俺はすぐにもう一度桜の家に電話をかけた。

プルルルル！プルルルル！プルルルル！

（頼む桜。出でくれ）

心の中でそう願いうも、また留守番電話の声が聞こえてくる。

俺は急いで教室に戻り、先生に早退をしたいと言つた。

「だが、まだ何かあつたと決まつたわけじゃあ……」

「そんな！お願ひします。早退させてください！」

俺は先生に頭を下げて、そうお願いした。もし、ただ単に寝坊し

て寝ていただけなら『よかつた』で終わる話だ。でも、もし何かあつたなら、探すなり何なりしないといけない。こうして話している間にも桜がヤバイかもしれないと、落ち着いてなどいられない。

そしてとうとう、未だに迷っている先生に向かって、「すみません」と叫んで教室を飛び出した。後ろからは先生が俺を呼ぶ声が聞こえるが、そんなものは無視して走った。

犯人

桜の家に着くと、俺はインター ホンを押すなど考えず、すぐに玄関を開けようとした。

ガチャガチャガチャ！

だが、扉は開かなかつた。普通に考えれば当然のことだが、桜の家に限つては例外。この辺りは決して犯罪〇というわけではないのに、桜の母親は家にいるとき、鍵をかけない。勿論、家に誰もいないうら鍵をかけるだろうが、昨日今日と娘が学校を休んでいる中、娘を置いて出かけるだろうか？…………まさか、桜も母親も学校の事件に巻き込まれたのか！？

一瞬、俺の脳にこの中で血まみれになつて倒れている桜と母親の映像が浮かんだが、すぐに冷静になり、事件が起つたのは学校だと自分に言い聞かせ落ち着かせた。

俺はもう一度ノブを捻り、開かないことを確認すると、インター ホンを押した。漫画やアニメみたいに、植木鉢の下に鍵があるなんてことはないし、幼馴染ということで合鍵をもつてゐるなんてこともない。

1秒、2秒、3秒……。音が鳴り止んでから十数秒。俺はノブを掴み、足が動かないようにドアの横にセッットして、思いつきり引いた。例え壊れても……というより、壊しても中に入る！

「ぐつ……いくつ……！」
バキッ！

「ガツ！」

思いつきり引くと、ドアはいとも簡単に壊れた。その反動で仰向けに倒れてしまつたが、すぐにドアを避けて起き上がり、中の様子を見てみた。

中に変わつたところはなく、入る前に想像した様子の何百倍もいゝ状況に思えた。……だが、すぐにそうも考えていられなくなつた。

玄関に置いてある靴が2組。綺麗に揃えておいてあつた。桜と母親の靴。母親の靴はあまり見たことがないが、桜の方は確實に断言できる。これは桜のだ。

俺は靴を揃えるのなんて気にせずに、急いで靴を脱ぎ捨て、家に入つた

「桜！いるんだろ！？」

2階にある桜の部屋。その扉を開け叫んだ。そしてそこには、

予想外の光景と、願つた光景があつた

「やつぱり……快だつたんだね。」

……快？桜の俺の呼び方に違和感を感じるが、今はそんなことを言つてる場合じやない。桜は部屋の隅にある机の近くに血まみれで立つていたのだ。

「桜！どうしたんだよ、その血は！？痛くないのか！？」

俺はそう聞くが、桜自身は全く痛くなさそつなうえに、凄く悲しそうな顔をしていた。

「…………」

だけど、桜は何も喋らない。……いや。といつより、何を喋ればいいかが分からぬいかのような様子で黙つて俺を見ていた。

「…………どうしたんだよ……」桜。

俺は意味が分からずによつくり桜に近づき、桜の肩に手を置こうとしたが……

「…………桜？」

なぜか桜は俺の手を腕で受け止め、唐突に隣にあつたスポーツバッグを持ち上げ、歩き出した。

「おい！桜！どうしたんだよ！？」

明らかにいつもと様子が違う。さつきの俺の呼び方も含めて、まるで桜と同じ姿を別人のようだ。

「下で話そ？ 答えることなら答えるから。」

桜は振り向くことなく、ドアの前で立ち止まって、そう言った。

桜は俺の返事を待たずに歩き出したので、俺はそこで止められなかつたが、とにかく、下に行けば聞きたいことを答えてくれるのだと

いうことを信じ、桜を追いかけた。

「コーヒー、お茶、水ぐらいしかできないけど、何か飲む?」

桜は台所に行くと、冷蔵庫を開け、そう聞いてきた

「いや、いらない。」

俺がそう答えると、桜は「そう」とだけ咳き、コップを一つ取り出し、それに水を入れて椅子に座つた。俺はその対面に座り、何か聞こうかと迷つた。聞きたいことはいくらでもある。まずは何か聞くか。今の桜は明らかにおかしい。

……迷つていっても仕方がない。俺は質問を決め、さっそく聞いた。

「親は?」

普段は家にいる桜の親が、今はいない。けど、さつき見たときは確かに靴があつた。桜は体調的には元気そうなので、家にいなくても買い物なのかもと思うが、靴があるのはおかしい。俺は初めは軽い質問をしたつもりだつたけれど、予想外の返事が返つってきた。
… 考えもしなかつた、最悪の返事が

「殺した。」

「なつ……！」

予想外過ぎて……いや、想像すらしなかつた返事が返つてきた。

「なんで!」

俺は大声で叫び、机を叩いた。だが、桜はそんなこと気にせず、水の入つたコップを持ち上げ、飲んだ。普段の桜なら、当然ビックリするような状況を、まるでなんでもない些細なことのような顔をして無視している。その態度が、余計にこの桜はいつもの桜と違うと、余計に思わせる。

「グラッジって、覚えてる?」

「え？」

桜は突然、聞いた質問と関係があるとは思えないような言葉を口にした。

「グラッジって、あの数日前に俺がメールを始めた、あのグラッジか？」

「そう。あれは……私。」

「な！」

この家に来たときから予想外の連續だが、今回のが一番予想外であり、意味が分からなかつた。

「快のために、順序立てて教えてあげる」

「…………ああ」

俺は心を落ち着かせ、桜の言葉に耳を傾けた。

「グラッジは英語で『恨み』って意味」

「恨み？」

余計に頭が変になつてくる。確かに、桜も人間だ。だけど、桜が人を恨むなんて考えられない。それも、本当にグラッジで、あのメールが本当なら、桜は今日までに111人殺していることになる。それほどまでの恨みがあるとは思えない。

「私は昔から最近までに、どうしても許せない人が14人いるの。まあ、最初は4人だつたけど。残り10人は最近。」

「14人？……15じゃないのか？」

すぐにメールの内容を思い出す。細かいところは分からぬが、確か、2回目以外は1人殺す内容で、4つ。10人が1つ。そして俺。合計15人のはずだ。

「快は少し違うの。」

「違う？」

「快の前で言うのはなんだけど、確かに最後には私、快を殺すつもり。」

もしこれが普段の桜の口調、雰囲気なら、『正面から殺人予告なんて始めての経験だな。』なんて笑つて終わらせただろうが、今

の桜からはまるで冗談な気がしない。おそらく、順番が来れば本当に殺すのだろう

「なあ、なんで人を殺すんだ？それに母親まで殺して。」

「お母さんは例外。私も殺す気はなかったの。最後まで、気づかれずに14人殺して、最後に快に全部話して一緒に死ぬつもりだったから。」

「…………」

桜の言葉に何も返事ができなかつたが、もう桜の言葉を疑うわけにはいかない。部屋で会つたときからずっと、悲しそうな目で俺を見ているのがその証拠に思えた。

「話を戻すね。次に、私は今の快が知つてゐる桜じゃないことは分かることね？」

「やつぱり……違うのか」

思つていたけれど、たんなる氣の迷いであつたほしいと思つていた。でも、桜の言葉を聞いて、確信した。解離性同一性障害。簡単に言えば、多重人格という精神病を聞いたことがある。おそらくそれだろう。

「『天野桜』は3人いるの」

「3人？」

2人なら分かるけど、3人？

「今の快が知らない桜。今の快が知つてる桜。そして私。」

確かに3人だ。だけど、今の俺が知らない桜？ということは、出会う前の桜？それなら俺が知るはずもない。……だけど、それどう関係があるんだ？

「まず、今の快が知つてる桜は、本当の桜じやないの。」

それは、なんとなく分かる。今の俺が知らない桜がいるなら、それは出会う前の桜。つまり、俺が知つてゐるのは偽者ということになる。

「私以外の桜のことは話せないけど、私の役目は話せるけど……聞く？」

「役目?」

「多重人格者になる人は、精神的に苦しんだ人。だから、生まれた人格は何かの役目があるの。」

「……そうか……。それじゃあ、お前の役目は?」「恨み」

その答えは、なんとなく予想していた。わざわざ『私がグラッジ。グラッジは恨みという意味』と教えてくれていたのだから。「私は他の私が持っているはずの恨みの全てを持つてるの。」

「……それが爆発して、恨みのある人を殺すって?」

「そう」

俺の言葉に、桜は迷いなく頷いた。

「……なあ、その恨みつて、なんなんだ? 最後に俺を殺すってことは、俺も何かしたってことだよな?」

「教えてもいいけど、それじゃあ意味ないの」

「意味ないって言つたつて、分からんじやどうしようもないじゃないか!」

いい加減、桜の対応に腹が立ち、思いつきり机を叩いた。その振動で、今度は水の入ったコップは倒れ、水がこぼれたが、桜は驚きもせず、近くにある布巾で机を拭いた。
「まず、快はそのことを忘れてるだけ。」「忘れる?」

「よく思い出してみて。快が小学校の時。」

そう言われても、小学校の時の記憶なんてこの年じゃあ曖昧過ぎる、ちゃんと覚えてる奴なんていないだろ……

「別に小学校の時の記憶全部じゃなくていいの。不自然な記憶の繫がりがない?」「不自然な繫がり?」

小学校は1年生から6年生まで。桜と出会ったのは小学校入学前だから、1年から6年までの間。その間、桜と同じクラスだったのは確か……1年、2年……4年、5年、6年だったか? 確かそう

だつたはずだ。だけど、例え別のクラスだつたとしても、桜とは一緒に遊んだりしたはず。

……いや、また。不自然な記憶を探すんだ。実際にあるはずのない記憶。前後の繋がらない記憶。

「…………

「……やつぱり、分からない？」

黙つている俺に、桜は残念そうな、それでいて確信していたような声でそう言つた。

「なあ。頼むから教えてくれよ。」

「それは死にたくないから？私に謝りたいから？」

2度目といふこともあつてか、桜は俺がそう聞くことが分かつていたかのように、俺の言葉のあとすぐこう聞いた。

……だけど、どうなんだろう。死にたくないのは当然だ。何か悪いことをしたつて言つなら、謝りたいって気持ちもある。……けど、今の俺の気持ちは死にたくないって理由が大きい気がする

「もしもね？快が思い出したとしても、私は快を殺すよ。」

俺が答えを出せないと、桜は小さくそう言つた。

「例え頭を下げる謝つたとしても、私にしたことと同じこと……ううん、それ以上のことをしてもいいって言われても、たぶん殺すよ」

「…………そこまで酷いことを……俺はしたのか？」

俺はいつたい、どんなことを桜にしてしまつたんだろうか。

俺は自覚のない自分の過ちにだんだんと怖くなりながらそう言つたが、突然、桜はなぜか初めて呆れたような顔になりながら言つた

「ううん。違うよ。私のこの恨みは、単に自分勝手なだけ。」

「自分勝手なだけ？」

「そう。今考えれば、とても些細な事。笑つて許せる」と。……だけど、快。子供の精神つて、凄いんだよ？一度感じたことは、なかなか消えないの。消そうと周りの人も協力してくれれば消えるかもしれないけど、何もしなかつたら、そのまま残るか、余計に強くなるの。」

「……つまり、初めはそこまで深刻じゃなかつたけど、ほつといったから強くなつたのか？」

「うん。だから私の身勝手。だから、快も私に反抗する権利はあるの。今ここで……私を殺す権利も」

桜の目は冗談を言つてゐる雰囲気はなかつたが、ここで殺される気もないと言つていた。

「……じゃあ、これから俺が選べるのは、俺と、あと数人が殺されるか、お前を殺すしかないのか？」

「…………うん」

桜自身も実際は辛いのか、顔は暗くなつていた。

「それで、どうする？私はこれから毎晩、順番に殺していく。それまでに快は私を殺す？なんなら、今すぐにでも。」

……どうしよう。これから殺される人、もう殺された人。桜は元は優しい人だから、罪のない人を殺すとは思えない。いくら身勝手だと言つても、絶対に殺される人は罪がある人だ。だから、それは俺も含めて償うべきだと思う。けど、問題は殺してまですることなのかだ。……なら、今ここで桜の骨を折つてでも止めるべきか？桜は片手な上に、身体能力は俺の方が上のはず。戦つて勝てないことはない。

ガタン

力で押さえ込む案に決めようとした瞬間、向かい側の桜の席から音がした。見てみると、桜は立ち上がり、コップを流しに持つていき、コップを置くと、ポツリと呟いた。

「……やつぱり……そうするんだ」

「！」

具体的に桜は今、押さえ込むなんて言わなかつたが、明らかに俺が考えていることが分かつたようだつた。

俺は反射的に立ち上がり、桜へと走つた。空手の経験など、格闘技の経験はないが、それは相手も同じ。思いつきりお腹を殴れば、動けなくなるだろう。そう考へ、一気に桜に近づき、お腹目掛けて

パンチを打ち込んだ

「……ごめんね」

しかし、桜に避けられ、耳元でそう言われたかと思ひと、逆に自分のお腹に殴られた感触と痛みが襲ってきた

「わく……ら……」

一瞬で痛さで立てなくなり、倒れたが、片手だけは開けて桜を見

た。

「「めんね」

桜は申し訳なさそうな顔をしながらもう一度そう言い、ついに歩いてしまった。すぐに追いかけようかと思うのに、体は動かず、どんどん田の前が暗くなつていき、ついには氣を失つてしまつた。

止める

「……………。……………おこー!」

誰かが叫んでいる。「ここはどこだ?」ああ。田を開じてるからか。あれ?開かない?

「……………ん?」

よくやく田が開くと、田の前に良の顔が凄い近くにあった

「……………」

「よかつた。目が覚めたのか」

「すまんが、とりあえず顔が近い」

俺がそう言つと、良は謝りながら俺から離れた

「それで、どうしたんだ? 桜ちゃんの様子が心配になつて来たんだが……」

「……………！」

「そうだ! 桜は! ?」

「だからそれがしんぱって、どうしたんだ? そんなに慌てて?」

未だに状況が分かつていない良だが、とりあえず俺は落ち着き、今あつたことを話した。

「そうか。確かに、その話が本当なら慌てるのも分かる

「それで、今は何時だ?俺はいつたい何時間気絶していたんだ?」

「今は17時だ。」

「9時間も気絶していたのか! ?」

「そうなるな。」

「急いで桜を探さないと!」

「待て、快!」

「急がないと! もうすぐ18時だ! 誰かが殺されるんだぞ! ?」

「待てつて言つてるんだ!」

急いで家から出ようとする俺を良は無理矢理組み伏せた。

「むやみに探しても意味がない。それより、お前に届いたメールを

頼りにした方がいい。』

「くつ……！」

ほんの少し落ち着いた自分の頭でも、その方が効率はいいと思う部分があるが、未だに落ち着かない部分では、解読なんて出来ないと諦めている自分がいるが、ここは頷くしかない。

「まず1つ目と2つ目だ。法則性なんかを見つけよう」

『『最初は地獄の炎が身を焼き、その体は二度と動くことはなくなる。自らが招いた炎によつて、灰になる』』それから『次は連續殺人、殺すのは10人。残すのは10の跡。近くじゃないけど近くにいる人。知らないけど知つている人。さあさあ次に死ぬのは10人。』だつたな』

携帯で文章を見ながら、音読した。言い終わつた後も良は黙つていたが、ゆつくり口が開いて、自信なさげに言つた

『1つ目だが、火事なのは分かつてるとして、快が桜ちゃんから聞いたことと、文章から、殺すのはあくまで1人。つまり、火事で死なながら、1人しか死なない状況。だから家で死んだと考えられないか？』

確かに、結果から見ればそう思う。他に火事で死ぬ状況だと、いくらなんでも被害者が出てしまつ可能性がある。桜が言うには、あくまで殺すのは1人。

『…………でも、それは火事だつて分かつてるからだろ？内容は『丸焦げになる』『自分で発火』の2つしか書いてない。つまり、結果が火事だつただけだ。他にもこの条件を満たす殺し方があるかもしない。』

『問題はそれだ。結果が分かつてるから、どうしても結果から考えてしまう。何か……その方法じやないと殺せないと証拠がいる。』『証拠……。文以外でのヒントなんて、桜が恨みを持つている相手。つまり、桜と面識のある人間。そんなの、分かるはずがない。』

『まてよ……。快。桜ちゃんは確か、解離性同一性障害と言つていたな。』

「ああ。けど、それがどうしたんだ？」

「それで、人格は3つ。『今の快が知らない桜ちゃん』『今の快が知ってる桜』『そして恨みを持つてる桜ちゃん』。」

「ああ。」

「ここまで聞かれても、俺には良が何を考えているのかが分からない。

「それと、殺す人10人は、最近できたっていうのは、おそらく昨日の10人」

「だから、そんなことが分かつたって、どうだつて言うんだよ」「残り4人は、つまり、昔の……今のお前が知らない桜ちゃんの時に起きたことってことだ。」

「そんなことは分かつてる！だからどうしたって言つんだ！」

「いい加減、良の言い方にイライラして、大声を出した。しかし、良は気にした様子もなく、話を進める

「ポイントは2つ。俺はお前から聞いた話でしか知らないが、昔の桜ちゃんは人見知りだったんだろう？ずっとお前と一緒にいるぐらい」「ああ。」

「出会ったのが小学校入学前。そんな時の記憶で、殺したいほどの相手が現れるとは思えない。特に、最初に殺されたのは35歳の独身男性。そんな人と一対一で話すわけがない。話したとしても、お前とは四六時中一緒にいたんだ。お前と面識がないわけがない。」

「……そうか。今なら分かるが、昔の桜がそんな年上の人とまともに会話ができるわけがない。小学校の中できえ、面識のない教師に話しかけられただけで泣いていた桜だ。外で知らない男性に話しかけられたら、泣いて近所の人を駆けつけるだろう。でも、そんな桜でも、俺と一緒になら、体のほとんど全部を俺の体で隠しながらだが、ゆっくりオドオドした調子で喋ることができた。だから、俺とはほとんどどすつと一緒にいた。外にもあまり出ない奴だったみたいだから、余計にありえない。

「第2に、口調だ。」

「口調？」

「俺の知ってる桜ちゃんは常に一寧語だった。昔の桜ちゃんはどうだった？」

「どうだつただりうか。グラッジのよつな喋り方？そつ考えれば、そつな気がする。でも、今も昔も変わらないと考えれば、そつな気がする

「おそらく、グラッジと同じ喋り方のはずだ。」

「なんでだ？」

「グラッジの役田は『恨みを晴らす』こと。つまり、口調まで変わる理由がない。」

「でも、恨みを晴らすひとは、荒っぽいイメージがあるんだがうする？」

「可能性としてはそれもある。だけど、それよりも、解離性同一性障害になつた理由が『恨み』で、その中にお前が入つてることは、お前にも原因があることだ。ここで考えるのは、人見知りな桜ちゃんが信用したお前に、何かしら恨みを持つようなことが起きたことだ。お前なら、一番信用していた人に裏切られたら……どうする？」

「どうする？……どうするのだろうか？一発殴る？いや、一番信用していた人に裏切られたなら、一発じゃあ済まないかもな。もししくは、信用していた奴だから、何かの間違いだと思って、ただただ困惑して、聞き返し続けるかもしれない。

「…………たぶん、呆然として、その後は…………たぶん、忘れてると思つ。たまに思い返しても、すぐに気を取り直して、他の友達と楽しくやると思つ。」

ゆづくつと、やう言つた。実際には分からぬけど、たぶんそうなるだろつ。一時は悲しくて、恨めしく思つだりうナビ、すぐに過去の出来事にして、楽しくやると思つ

「じゃあ、その他の方達さえいなかつたら？樂じことなんて、何もなかつたら？」

「…………」

「これは桜の場合。俺が何か桜に恨まれるようなことをした場合、桜はどういう行動を取るか。誰も友達がない。どうすればいいか相談する相手もない。親は桜の内気な所を心配していたから、相談なんてなかなかできるものじゃない。俺なら…………距離を置いても、なんとかやつていけると思う。例えそのとき友達がいなくとも、頑張れば作れると思う。…………でも桜は？ずっと友達ができず、唯一話せる人にも裏切られたら、どうするだろうか。たった1人で過ごす？…………それはないと思う。桜は人見知りだが、1人が好きなわけじゃがない。むしろ、寂しがりな方だ。なら、可能性があるとしたら…………」

「多少のことは堪えてでも…………媚を売つてでも関係を続けようとする？」

「おそらくな」

「で、でもちょっと待てよ。俺は桜に何かした覚えはないし…………仮にしていたとしても、いつからしなくなつたんだ？」

「それが分からんのだよ。今のお前を見ると、むしろ恨まれるようなことをしたこと自体が不思議だ。」

「…………つまり、無意識のうちに、たつた1回だけ、恨まれるような大きなことをしたってことか？」

「おそらくな。…………で、おそらく、その結果がお前の知つてる桜ちゃん。これは俺の見た感じだが……桜ちゃん、今までお前に反抗……というか、お前の意見に異見したことあるか？」

「桜が俺に異見？…………そう言われば、ないとと思う。…………」

「いや、ない。俺が何か言つと、桜はいつも笑顔で『分かりました』と言つていた。喋る内容は友達関係と変わらないけど、常に俺の意見は尊重していた。事実を言い、その事実が俺の言つたことと違うことはあっても、桜自身の意見で俺と違う意見を出したことなどない。」

「…………確かに、それが本当なら、口調が変わつた前後が分かれれば

「原因も分かるな」

「だけど、不思議なことが一つある」

「不思議なこと?」

「お前の親と桜の親は、なんで知つていて放置したのかだ」

「！」

「そうだ。俺の親はともかく、桜の親が気づかないわけがない。なら、なんでほつといった？それを言えば俺と桜は強制的に離れなくてはならなくなるから？それとも、それほど大きなことだとは思わなかつた？……いや、そんなことはないはずだ。口調が変わつたのは勿論、俺に対する態度も変わつたはずだ。それを不思議に思わないはずがない。知らないはずもない。俺の方に悪いことをした意識がなかつたからか？」

「とりあえず、そのことは考へても埒があかない。時間もないしな。とりあえず、今の口調はいつからだ？」

「いつから？桜が言うには、小学校の頃に事は起きた。…………いつだ？突然変われば印象に残るはずだ。…………けど、俺の記憶では、あつたときからあの口調だつた気がする。

「分からぬ。」

「…………ううか。なら次だ。子供の頃、怪しい大人と会わなかつたか？」

「怪しい大人？どういうことだ？」

「次の文は『後ろめたいことがないならば、前を見て歩け。もし非があると思うなら、その頭を下げ過去を悔い改めよ』だ。今までも恨みがある人を殺したが、今のところ何かしら犯罪に関わつたかは分かつていない。けど、今回はおそらく、誰が見ても後ろめたいこと、つまり、犯罪に関わつていたことだと思う。小学生がそんなことをして平然としてるわけがないから、大人だ。」

「そう言われると、そもそも考へられる文だ。」

「そうか。でも、文的には『謝れば許す』とも取れないか？」

「ああ。だから、もしかしたら犯した罪は小さいかもしない。」

「…………」

…けど、もしかしたら、『悔いてるなら多少は楽に殺す』という意味かもしれない。間接的に被害を与えたとか。』

「なるほど。桜は殺すと言つてゐるから、たぶん後者だな。でも、そ

んな奴、どうやって探すんだ？ 間接的じゃあ、見つけようがないだろ」

「そうでもない。さつき、俺は『怪しい男と会わなかつたか？』と聞いたけど、それはない。」

「なんで？」

「会つて、被害を受けたなら、直接だ。間接的つてのは、元々被害が及ぶはずのない者が受けた場合だ。』

「それでも、見つける方法なんてあるのか？」

「間接的に被害を受けることなんてたがが知れてる。それを行つたのが大人なら余計にな。』

「どんなのがあるんだ？ というか、本当にあるのか？」

「…………1つだけ、小学校の頃に起きたことがある。この町……いや、もしかしたら、この国の人全員に影響を与えたかもしれない」「そ、そんなことがあるのか？」

「何かあつただろうか？ 全員が影響を受ける。つまり、俺も受けたということだ。……何かあつたか？」

「不法な核実験による地震」

「地震？」

「覚えがない。……いつだ？ 小さな地震ぐらいは経験があるが、不法な核実験なんて聞いたことがない。」

「やつぱりな。……つまり、お前の中から消えているのは小学3年生の頃だ。』

「小学3年生？ ……いや、そんなはずはない。はつきりとは思い出せないけど、確かに3年生のときの記憶はある。桜と違うクラスになつて、いつも桜が俺のクラスに遊びに来ていたのを覚えている」「その顔だと、3年の記憶はあるみたいだけど、何も全部がないわけじゃない。事が起こった前後……もしくは、事件のことだけでも

覚えてない可能性があるからな。」

「……仮に3年生のときに何かあったとしても、地震だけで恨みをもつようになるのか?」

「地震だけじゃない。おそらく、火事もだ。」

「火事?」

「ああ。昔は4人しか殺したい人がいなかつたということと、桜の性格を考えれば、全部が同時に起こつたと考えるべきだ。そして、第一の殺人は火災。」

なるほど。火事の時に地震。他にも3つ。今日から3日分も同時に起こつたということか。

「じゃあ、早くその核実験をした人を探そう。誰なんだ?知ってるんだろう?」

俺がそう言つて立ち上がるが、しかし良は立ち上がらなかつた。

「どうしたんだ?まさか知らないのか?」

「いや……知つてる」

「なら……!」

「ある国の首相だ。……けど、そんなのどうやって場所を調べるんだ?」

絶望的状況に直面したように、良は声を絞り出すように言つた。確かに無理だ。……けど、どうやって桜は場所を特定したんだ?そう思つたとき、数日前のことを思い出した

「……なあ、良」

「なんだ?」

「もしかしたら、分かるかもしね。」

「どういうことだ?」

俺は桜と始業式にした話を良に話し、すぐにその人で合つてることを確認すると、泊まつてゐるホテルを調べ始めた。

「どのホテルか分かつたぞ!」

「ホントか!?」

「ああ。30分ほどで着く」

今の時間は17時30分。ギリギリか。

「……けど、これでもし間違つてたらどうするんだ?」

「マイナスに考えるな、快。プラスに考える。」

良は俺の言葉にそう返事をすると、サッサと玄関へ走り出した。
俺も後を追つて、走り出した。

止まらない

目的のホテルに着くと、すぐに入り、目的の人物の部屋をフロントで聞いた。……しかし

「いいえ。そのような人はこのホテルには泊まっていません」

「そんな！もう一度確認してください！」

返ってきたのは、その人物すらないという返事だった。俺はすぐにもう一度確認するよう言つたが、同じ返事が返ってきた

「良。どういうことなんだ！？」

「おそらく偽名で泊まってるとしか……」

それじゃあ探しようがない。

「快。一旦外出よ。」

「でも、もうすぐ時間だ。いつ殺されるか分からんんだぞ？」

流石に小さな声で良にそう言つたが、良はそのままホテルを出て行つた。俺も仕方なく後をついていくと、良は周りをキョロキョロしだしだ。

「どうしたんだ？」

「もし俺が誰かを殺すとき、理想的なのは遠距離から誰もいないときにライフルででも撃つことだ。」

「どうしたんだ？急に」

突然、良が意味の分からないことを言い出した。

「今の時代、ライフルなんて簡単に手に入るが、問題は他にもいくつもある。『居場所』『周りの人物』『地形』そして何より、桜の場合には『殺し方』」

確かに。このホテルの周りの建物は高い。ホテル自体も高いけど、遠くから撃とうなんて考えれば、相手が最上階辺りにいないと無理だ。それに、いくらなんでも事前にどこに泊まるのか調べて、盗聴器なんかを仕掛けるのも無理だ。

「殺し方については不確かだが、恨みが地震ということなら、おそ

らく落石、落盤。ホテル自体を揺らしたりするのは無理だから、おそらく

「外に出たときを狙つて何かを落とす？」

俺は良の言葉の途中でそう言った。

「そういうことだ。」

「でも、それじゃあどこを見てればいいんだ？この辺りは高い建物があるんだから、桜にとつてはどこでもいいわけだから、数が多い。」

「たぶん大丈夫だ。ここから神社までの道と人が少ない場所を考えれば、たぶんそこに桜がいる」

「じゃあ急ごう。ここから神社までの最短ルートはこっちだ」

俺は神社の方向へ走りだし、人気のない場所を探した。周りにはホテルやビルなどが沢山あり、とても人気がないとはいえない。むしろ人が多い。

「おい。本当に人気のない所なんてあるのか？」

「分からぬ。けど、人が沢山いるなかで重たい物を落とせば、嫌でも見つかるだろう！」

それもそうだが、人気がありすぎる。本當にあるの

「！」

「どうしたんだ？」

急に止まつた俺を不思議そうに見ながら、良が聞いてきた。

「桜がいた！」

「何！？」

俺はそれだけを言つと、すぐに桜のいた方に走り出した。桜はすぐくに角を曲がつて見えなくなつたが、確かに裏路地へ入つていつた。
「確かに裏路地なら人気はないけど、仮にも首相ともあろう人が裏路地なんかに来るのか？」

「分からぬけど、確かに桜が入つて行つたんだ」

桜の消えた路地を曲がると、今度は桜かどうか見分けれるほどはつきりとは見えなかつたけど、再び角を曲がつていた。それから何

度も角を曲がり、ついには廃ビルに入つていった

「なあ、何かおかしくないか？」

「何が？」

桜に続いて廃ビルに入ろうとするといふと、良が突然、そんなことを言い出し、俺を止めた

「追うのに必死で気づかなかつたけど、おかしそうさる」

「だから何がだよ。はやく止めないとやばいんだぞ」

「分かつてる。……けど、さつきから桜が見えた時の姿勢を見ると、走つてゐるよつて見えないんだ。」

「それがどうしたつて言つんだよ。」

「分からぬのか？ 桜が歩いてゐるなら、俺たちはなんで走つて追いつけないんだ？」

……言われればそうだ。ずっと走つて追いかけてるのに、全然追いつけない。それどころか、今思えば、なんでいつもギリギリで見えなくなるところを見るんだ？ 都合が良すぎる

「何かの罠の可能性がある。

「……でも、だからつて、このまま放つておくわけにもいかないだろ？」

「分かつてる。……けど、気は引き締めておけよ？」

「……ああ。」

まさか、桜相手に会つたまえだけに怪しぇんだり、注意しておくなんておかしいと思ひながらも、今の桜は普通じやないと思ひ、むしろ集中できた。

桜の階段を上る音を頼りに、音を立てないよつて階段を上つていくと、とつとう屋上まで來た。俺と良は気づかれないよつて隠れながら、ドアの外を見た。そこには確かに桜がいて、こじりこじりと背中を向けて屋上から下を見ていた。

「……どつする～ソツとよつて、とつおせえのか？」

「…………それしかないだらう。」

俺はそう返事をすると、ゆっくり慎重に歩き出した。音を立てな

じよつに、足元にある鉄くず、石など蹴らなによつ。

「来たんだ?」

「！」

後ろでも俺と同じよつに良の体が跳ねたのが分かつた。そして、俺はそれと同時に近くにあつた石を蹴つてしまつた。石は音を立て桜の方に転がつていき、桜はそれを拾つた。

「見つからぬよつにつけんなら、もつと上手下やうないと。」

「……いつから氣づいてたんだ?」

俺は観念して桜にそう聞いた。良もドアの影から出てきて、俺の横に並んだ。

「初めから。……というか、わざと見つかって、ここに連れて來たんだから!」

「やつぱり罷か?」

良が隣で苦々しそうにそつと言つた。

「罷でもなんでも、桜を止めるさ。」

「無理だよ。」

桜はそういうながら、顔をこつちへ向けた。その顔は数時間前と同じくらい無表情で、初めてその顔を見たときと同じくらい、桜とは別人なんぢやないかと思えた。

「無理かどうかはやつてみないと分からぬだろ?..」

「分かるよ。後をつけられたなら可能性はあるけど、後をつけさせたんだから。」

「それでも、今こいでお前を抑えれば止められるだろ?..こつちは男2人なんだから。」

「勝てるの?」

そう呟つと、桜は呆れたよつに一度下を向いて

そう呟つた。いつもの桜なら余裕だが、今は違う。数時間前の桜の家でのことと、今の桜の身体能力を今までの桜と同じと考えたらい

けないことぐらい分かっている。俺一人なら、負けていると思つ。できても時間稼ぎ。……でも、今は良がいる。いくら身体能力が高い片手。同時に攻めれば勝てないわけがない。

「快。お前は右だ。俺は左。」

良も同じ事を考えていたのか、俺にそう指示を出した。

「……分かつてるとと思うけど、聞こえてるよ?」

桜は親切にもそう言つてくれたが、そんなことは分かつている。けど、聞こえても問題ない。どうせ他に方法なんてないんだから、何かを話した時点で作戦はバレバレ。話さなくて連携を取れないほうが不利だ

「いくぞ!」

良の声と共に、俺は走り出した。桜はそれでも無表情に立つたままで、距離はドンドン小さくなり、良が飛びつこうとした瞬間

「ぐつ!!」

桜が突然、さつき拾つた石を良の足へと投げた。ちょうど飛びつこうとした良はバランスを失つて倒れてしまい、それに気を取られた俺は急に近づいてきた桜に反応できず、俺もこかされてしまった。

「ね、無理でしょ?」

桜はいつの間にかドアの近くまで行き、近くに立つた四角い、大きな石を拾つた。

「……それで首相さんを殺すのか?」

「そうだけど?」

当たり所が悪かったのか、良は足を引きずりながら俺の近くまでやつてきながら桜にそう聞いた。すると良はしゃがんでいる俺と話せるよみじやがみ、小声で言つた

（快。もう一度同時に攻めるぞ。たぶん、次にアイツはあれを投げない）

（なんで分かるんだ?）

（あれがなくなったら殺せないからだ。だから、たぶん避ける。今度こそ飛びついて抑えるぞ）

良はそう言つと、良は立ち上がり、すぐ走れる準備を始めた。俺も立ち上がり、走れる構えをした

「……また同じ手？」

桜はそう聞いてきたが、俺たちは答えずに、かわりに走り出した。桜は相変わらず立ったままで、近づいてくるのを待っていた。そしてついに、手に持っているものを投げる前に良と俺が飛んだ。捕まえた。そう思った瞬間、桜が後方へジャンプした。元々桜の立っていた位置にジャンプした俺と良はちょうどその位置でぶつかってしまった。

「……終わりだね」

顔を抑えながら桜見上げると、桜はそう言つた。そして、そのとき初めて桜の手に持つているものが何なのかが分かつた。それは石なんかじゃなくて、何かのスイッチだった。そして桜は、迷いなく、そのスイッチを押した。

「くつ！」

俺はすぐに起き上がり、桜の手からスイッチをもぎ取つた。それはさつきまであんなに難しかつたのに、アッサリと取れた。

「もう遅いよ。」

「分からぬいだろ？ 見ながら落としたわけじゃないんだか、外れたかもしねいだろ？」

「当たつたよ」

何を根拠に言つているのか分からなかつたが、不意に桜は自分の左目に手を持つていくと、それを取つた。暗さと距離で分からなかつたが、そこには携帯電話が貼り付けてあつたようで、手には携帯が握られていた

「……つまり、それで見ながらスイッチを押して、当たつたことも確認したわけか。」

起き上がつた良が悔しそうにそう言った。

「そういうこと。だからもう遅いの。」

「だけどお前さえつかまッ！」

「起き上がつた良が悔しそうにそう言った。

「そういうこと。だからもう遅いの。」

「だけどお前さえつかまッ！」

そこまで喋ると、桜は突然良に素早く近寄り、俺のときと同じようにお腹を思いつきり殴つた。良は呻きながらお腹を押さえ、丸まってしまった。それを呆然と見ていた俺も、俺の方に飛んでくる手に気づけば、良と同じように殴られた。幸い気を失いはしてないけれど、とても動けるような状態じゃない。そしてそのまま、遠ざかっていく桜を見ているしかできなかつた。

よつやく動けるよつになつたときにはすでに30分がたつており、横になつてゐる間に遠くからサイレンの音も聞こえた。

「これからどうする?」

良がずっと黙つてゐるので、とつとつ俺から話を振つた
「……お前はどうするんだ?」

すると、逆に良に聞かれた。今回のことでの桜がこれからも殺すことには分かつた。それに、メールのヒントもうまくやれば解けることも分かつた。……でも、どうやって止めるんだ? 無駄に桜を追つて、同じ事を繰り返すより、今すぐこの町から逃げた方がいいんじゃないか? いくら桜でも、それなら追つて来れないだろう。……けど、逃げていいのだろうか? 別にアニメや漫画の主人公みたいに力ツコつける気はないが、やっぱり桜は大事な友達だ。なら、悪いことをしたなら謝らないといけない。でも、今はどんな悪いことをしたなら謝らないといけない。でも、今はどんな悪いことをしたのかが分からぬ。ならとりあえず止めるしかない。

「俺は桜を探すかな」

とりあえずそう答えた。正直、今回だつて良がいたから桜を探せたようなものだ。もし良が諦めるなら、たぶん俺一人では追えないだろう。けど、やっぱり桜に何をしたのか知りたいし、何より死にたくない。……まあ、どっちが重要かと聞かれれば死にたくない方だけどな。

「……じゃあ、俺も手伝うよ」

良も何か迷つていたのか、少し送れてそう言つてきた。

「じゃあ、さつさと次の内容を調べるか。時間があるつて言つても、24時間ぐらいしかないんだし、睡眠も取らないといけないからな。

「学校はサボるとして、もう夜も遅くなる。睡眠に6時間は必要として、時間は約18時間。とは言つても、こんなのはただの予測。

走り回った分、余計に寝てしまつ可能性だつて十分に考えられる。なるべく時間は節約していかないと。

「なり、さつさとメール開け。次の文はなんだ?」

起き上がつて座つた良がそう言って俺をせかした。俺も座つて、携帯を取り出し、メールを開いた

泥棒は物を盗むだけ。強盗はもっと大切なものを取つていく。さあ氣をつけて、今度は死神が貴方の命を取りに来るよ。

「桜ちゃん、今度のは直球だな。」

「ああ。」

今度の文は誰が見ても相手は明白。泥棒か強盗。……けど。範囲が広すぎる。この世の中……いや、例えこの町で起こつた犯行だけを考えたとしても、1日や2日で調べるなんて無理だ。警察に協力を願い出ても、おそれらしく供の戯言として処理されるだらうし、信⽤してもらつても、調べるなんて不可能に近い。

「たぶん、どんな罪を犯したか書いても調べられないと思つたんだろ。」「ああらぐ、良の言つとおりだ。……どうする。メールの謎を解かずには桜を探すか?いや、余計に無理だ。

「……快。他にヒントか何かないのか?」

悩んでいると、良がそう聞いてきた。とりあえず、俺だけではなんともいえないので、今までのメールを良に見せた。もしかしたら、俺が気づかないだけで、良なら何か気づくかもしれない。

「なあ」

俺は俺でメールを読み返し、なんとかヒントを見つけようとしていたとき、良から声をかけられた

「この『NO NAME』って誰なんだ?」

「それが分からんんだ。内容的に関係あるとも思えるけど、意味が分からぬ文章だし……」

「この『、』の前後は勿論繋げてみたんだよな?」

「ああ。意味分からぬ文章になつたけどな」

俺はもう一度繋げて読んでみたが、はやり意味の分からない文になつた

「…………。『いえひがつ』はあむおとすびょうこんをすヘル』

「は？ どいつことだ？」

「たぶん、そう書いてある。『病院』の前後に『、』がいくつかあるから、たぶん『、』一つで一つ前の語の最初。現に『2日前』の『前』が平仮名だ。『え』が必要だったってことだ。」

「なるほど……。けど、結局どいつことなんだ？」

「更に『』で文が一つ終わると考えると『いえひ。がつ』はあむおとす。びょうこんをす。ヘル』

「……分からないんだが？」

「これは3つ目の中から考えたことだが、たぶん3つ目は『ホテル、落とす』だと思つ。ほら、こう分けると分かりやすい。」

良が携帯で漢字変換した文字を見せてきた。そうしてみると、確かに『ホテル、落とす』だ

「…………待てよ。この文は3つ目で、今回は3回目。…………て」とは

「ああ。たぶん、これ、順番通りに殺す場所、殺し方が書いてあるんだと思う。一つ目は『家、火』2つ目が『がつ』、刺す。『がつ』はおそらく『学校』だろう」

「でこいことは次のは『びょうこんをす』だから、病院で誰かを刺し殺すつてこととかー？」

「そういうことになるな。」

「でもちよつと待て。どうやってそんなことするんだ？ 病院となると、そう簡単に刺し殺したりできないだり？」

「考えられるとしたら、その相手が入院患者で、その日、手術があり、桜ちゃんが医者に変装して刺し殺す」

良はそう言つたが、自分で言つていてありえないと思つたのか、冗談口調だった。……けど、本当にそのぐらいしかない。少なくとも

も、殺す時には刃物を見せないといけないので、個室でもなければ他の人に見つかる。かといって、個室の患者なんてそうはない。

「……快。とりあえず、病院ってことは分かったんだ。この辺りに病院は3つ。その中で個室の患者だけでも調べよう。俺はここにこご。お前はそっちを頼む」

「分かった。じゃあ、俺の部屋で待ち合わせしよう」

考えても仕方がないと判断したのか、良は携帯で地図を出し、そう言つた。俺はそれに従い、ビルを降りた。俺と良は決めた病院に向かうため、ビルの下で別れた。

数時間後、すっかり夜も遅くなつたが、なんとか個室の患者の名前は教えてもらえた。聞き出すのが大変だつたが、とりあえずはなんとかなつた。……凄く看護婦さんに怪しまれただけど。

結果、個室の人は3つの病院合わせても4人。

1人目は若い女性。極度の対人恐怖症らしく、病院には無理を言って個室にしてもらつたらしい。入院理由は骨折。周りには家が沢山ある病院。

2人目は中年の男性。フリーターで、清掃会社のバイトをしていたら落ちたらしい。幸い、骨折で済んだらしいけど、手足が片方ずつ骨折しているらしい。個室の理由は友達が来て騒がしいから。1人目と同じ病院

3人目は中年の男性。個室しか空いていなかつたので個室。体中に火傷の跡がある。元極道という噂。一酸化炭素中毒により、最近入院。今は何をしているのか不明。周りが木に囲まれた病院。

4人目は中年の女性。精神的ストレスにより、情緒不安定。過去に刑務所に入つていたこともある。周りに店が沢山ある病院まとめてみるとこんな感じになつた。

「……誰が怪しいと思う？俺はこの中年の女性かな。刑務所に入つてたつて言つてたし」

俺はまとめた紙の上に手を置き、女性を指差した。

「俺は…… 2人目かな」

「？なんでだ？」

「まず1人目はありえないと思う。確かに『若い』と一口で言っても幅は広いが、俺が話を聞いた看護婦も若かった。それも大学を出て2、3年の女性だ。年寄り……とは言わなくとも、中年が言ったならまだ分かるが、20代の女性から見てその女性が若かつたのなら、よくてその人と同年代。おそらく、1人目は10代だ。だから、年齢的におかしい」

なるほど。確かにそれは言えるかもしない。もし10代なら、数年前の話になると、強盗なんてやつているとは思えない。

「次に3人目だが、今までの過程から桜ちゃんが恨みを持つに至った状況は『火事』『地震』『何か』『何か』が起きてている。つまり、この強盗は不幸にも……というべきかは分からぬが、火事の時に現れている。だからこの人かとも思つたんだが、元極道なら火傷も納得がいく。何より、個室の理由が『たまたま他に部屋がなかつたから』だ。いつこの計画を考えたのかは分からぬけど、少なくともこの殺人までに3日は経つてゐる予定だ。それまでに部屋が変わらないなんて保証はない。

4人目は情緒不安定だからだ。短期の入院なら誤魔化せただろうが、彼女はもう15年も入院しているらしい。事件の日には既に入院しているし、そんなにも長期には誤魔化せない。誤魔化せたとしても、今はもう誤魔化す理由がない。」

「そうか。……じゃあ、やつぱり2人目か？」

「俺はそう思うけど、まだ3人目の可能性も残つてゐる。」

「え？でも、今ありえないって」

「まず火傷は元極道なら説明が付くというだけで、それは嘘かもしれない。……というより、どんな火傷かは知らないけど、体中の火傷の傷なんて、それでも言っておかないと怪しまれる。それから個室。俺たちはずっと『個室で殺される』と考えているが、個室で殺されるとは限らない。何か……その人の癖さえ知つておけば、殺せるつてこともある。」

「確かにそうだな。けど、それじゃあどうするんだ？1人目と4人ははないとしても、2人とも違う病院だし、どっちかに的を絞らないと。」

「2人目か3人目か。早く決めないと……時間がない。

「……仕方ない。今日は寝よう。」

「……分かった」

疲れていることは自覚していたので、考える時間がないといっても、寝れば今よりちゃんと考えれると思い、納得した。どうせ学校を休んで明日も桜を追いかけるので、良には家に泊まつてもらつた。両親の部屋から布団を持ってきて敷き、俺はベットに入つた。……しかし、寝ようと思つても、やつぱり頭から桜のことや、次の標的の人気が頭から離れない。2人の入院理由は骨折と一酸化炭素中毒。どちらも意図して起こせる症状ではない。事故に見せかけようとしても、どうしても人の手が加えられた跡が残る。それを残さずに骨折や一酸化炭素中毒にできるのか？……いや、出来る。そうだ、あの方法があつた！

「良。起きてるか？」

「…………ん？…………ああ。」

少しウトウトしていたのか、良の眠そうな声が返つてきた

「良。一酸化炭素中毒にする方法があつたぞ。」

「何！？」

いきなりそう言われて驚いたのか、大きな声で驚いていた

「どういうことだ？一酸化炭素中毒なんて、密室で火を起こしたりしないと起きないんだぞ？そんなことをしてみろ。絶対に見つかるし、見つからなくても死ぬだろう」

「いや、1つだけある。可能性としては低いかもしれないけど、これしかない。第一の殺人の火事を使えば、簡単に状況は作り出せる

「…………確かに作り出せるが、そんなのはやる価値がない。そもそも中毒になる前に逃げ出すかもしれないし、死ぬかもしれない。それになぜそいつがそこにいると断言できる？」

「別にいなくてもいい。縛つて監禁して、頃合に見て連れ出せばいいんだから。」

「だが……そう簡単にできるのか？その方法だと、おそらく桜ちゃんは顔を見られることになる。警察にそのことを言われたときのことを考えてないとも思えない。それに、それならわざわざ連れ出さず1人目と一緒に焼き殺せばいいんじゃないかな？」

「だけど、最近に一酸化炭素中毒になることなんてそれ以外にありえない。火傷の跡たつてある。それに、2人目の骨折。これをバレずに意図的にやるなんて無理だと思う。」

「それは……確かにそうだが……。」

「まあ、まだ時間はあるからこれから寝て、起きてからまた考えてみるが、もし他に何も思いつかなかつたら3人目を見張つていよう」

「…………分かった」

良はまだ納得がいっていないようだが、本当に何もなればそっちにかけた方がいいと考えたのか、少し悩んだあと、そう返事をした

朝起きると良が下で寝ていた。聞いた話では、良はいつも早起きらしく、俺が起きる頃にはもう起きてると思っていた。俺はとりあえず、良を起こさないように移動し、私服を取り出し、部屋を抜け出した。別に男同士なので気にすることはないのだろうけど、とりあえず着替え中を良に見られるのは嫌だ。良の方も、俺の着替えなど見たくないだろう。と、いうわけで、1階で着替えを済ませた後、何か良のために朝食を用意しようと冷蔵庫を開けたが

「……見事に何も無いな」

肉や魚はあるものの、料理はできない。すぐに食べられるものは数日前に食べた。

「……仕方がない。良自身に作つてもうつか」

正直、客である良に料理をさせるのはどうかと思ったが、食べるのには良だけだし、相手は良なのでいいかとも思えた。

良は9時くらいになると起きてきた。もし授業に出るつもりだったのなら、普通に遅刻だ。

「良、起きたばかりで悪いんだが、すぐに食べられる物がないんだ。もし何か食べるんだつたら、肉や魚があるから、自分で調理してくれないか？」

「ん……？いや……いい……。俺は朝食べないから……」

良が昨日の夜以上に眠そうな感じで返事をしてくる。なんだか新鮮だ。いつもシャキッとした方が、元気な感じなのに……。それに、良が朝ごはんを食べないのも驚きだ。そう思つてると、良は俺が何を考えているのか分かったのか、答えてきた

「いや……。俺の両親が朝弱くて、妹が作ってたんだけど、それが不味くてな……。」

俺個人としては、どれだけ不味い料理なのか食べてみたい気がしたが、口には出さないでおいた。

「じゃあ、もう少し目が覚めるまで待つて、それから今日のことを考えよう」「う

それから30分ほどボーとした後、今日のことについて考え始めた。しかし、いくら考へてもいい案はない。2人目と3人目。どちらもハズレではない気がするし、どちらもハズレの気もする。いくら考へても分からず、ついにそろそろ決めないといけない時間になつた

「……仕方ない。もう、快が言つたように3人目に的を絞ろう」「う

これ以上考へても無駄だと考え、良はそう言つた。俺も当然それに賛成で、すぐに家を出て病院へ向かつた。……しかし、病院に着いてその人のことを聞いたとき、予想外のことが起きた。

「その患者さんなら、数時間前に退院したわよ？」

俺と良は一瞬顔を見合させた後、良はすぐに走り出した。俺も驚いたが、すぐに良を追つた。後ろから看護婦さんに走るなど言われたが、俺と良はかまわず走つた。

「どうしたんだ、良！？」

「殺す場所は病院だ。だから、まだこの中にいるはずだ。2手に別れて探そう。全身に火傷の傷がある中年男」

「分かった。」

病院内を走り続けた。エレベーターなど使わずに1階から屋上まで、階段を上がつたり降りたり。フラフラおぼつかない足取りの老人。骨折して松葉杖を使う青年。ベットで寝る女性。いろいろな人がいる。……けど、全身に火傷の跡がある中年の人なんて見当たらぬ。

「いたか！？」

一通り全部を見て回つた後、良を見つけて話しかけた。その間も探すのをやめない。

「いや、いない！全部見たはずなんだが……」

俺自身も全部見たと思う。意図的に隠れているなら別だが、そうでないなら見つかるはずだ。他に探していらない場所なんてない。

「…快、病院の外… 周りの森は調べたか？」

「いや、まだだけど、そんな場所にいるのか…？起こすのは病院だぞ！？」

「周りの森も病院の敷地内だ。可能性はある。」

「わかった。今から行こう」

他に探す場所もなく、とりあえず病院を出て森に入った。逸れたら不味いので一緒に探し、どんどん森を進んでいく。時間がもうない。もうすぐ時間が来る。そんなとき、声が聞こえた

「ギヤアアアアア！」

「つ！悲鳴！？まだ時間はきてないはずだぞ！？」

俺は時間を確認してみると、良の言つたとおりまだ時間は数分ある。この時計は正確なはずだから、間違いはない。

「くつ！急ぐぞ！」

良は更にスピードを上げ、声の方へ走つていった。そして、だんだんと森が開けていき、その先に桜がいるのが見えた

「桜！」

その場所には、木で見えなかつたが、桜の視線の先には全身を火傷した中年男性がいて、背中から血が出ていた。そして、桜の手に持つている包丁には血が付いていた

「……来たの」

桜は少し俺たちの方を見た後、またすぐ後に痛さで呻いている男に目を向けた。

「た、助けてくれ！殺される！」

男は立ち上がることも出来ず、ビクビク震えながら俺たちにそう懇願した。けど、俺たち自身も動けなかつた。今の桜が、あまりにも怖すぎた。前までの桜はまだ情けとかそういう感情が少しあは見えた。……けど、今の桜には何も見えない。ただ自分の腕時計を見て、無表情に時間が来るのを待つていて。おそらく、さつき刺したのは何か不都合なことをこの男がしようとしたから。そして、あと一分もすれば、桜は俺たちの前でも容赦なくこの男を刺す

「桜やめろ！この男が何をしたか知らないけど、もつ西のことだろ！？警察に引き渡して、そこで罪を償わせろよー。」

「快は黙つてて。」

俺の言葉に桜はそう答えた。昔の……俺の知つている桜なら絶対にだせないような、……もし自分が殺される対象なら、これから死ぬんだと思えるほどの威圧感と一緒に……そう答えた
「でも……そうだね。もう初めの予定を話すけど、私、初めは何度も何度も死なないようにこの男を刺して、苦しませた拳銃に殺すつもりだつたけど……快がいるからね。もし貴方が私に何をしたのか覚えてたら、一刺しで殺した挙げる。」

「なつ！」

結局、桜はこの男を殺すのをやめるなんて考えはなく、淡々とそう言つた。

「覚えてる？貴方が私に……私たちに何をしたのか」「は……え……あ……」

「あと30秒あげる」

男は意味が分からず、ただ驚くだけだが、桜はそんなことにかまわず、時計で30秒を測り始めた。その間も男はようやく自分がどうなるか理解したのか、一生懸命思い出し始めた。

「30秒」

しかし、男は何も思い出せないまま、30秒が過ぎた。男はその言葉を聞いた瞬間には立ち上がり、桜とは反対方向へ走り出した。しかし、桜は慌てることなどせずに、その手に持っていた包丁を……投げた。その包丁はまるで吸い込まれるように男の背中に向かっていき、じく自然に、当たり前であるかのように刺さり、男は突然の痛みに呻きながら倒れた。

「ね、快。彼は自分が何をしたのかすら覚えてないの。」

普段の桜なら確実におびえているであろう状況の男を前に、桜は既に分かりきっていたように、無表情にそう言つた。桜はそのまま男に近づくと背中から包丁を抜き、また刺した。そして抜き、また

刺す。それを何度も繰り返した。俺と良は呆然と見ているしかできず、桜が立ち上がった頃には既に数分前から呻き声すらで、人でさえないような声を出していた人が転がっていた。桜は最後の止めのよう立つた状態から首に包丁を落とし男の首に包丁を刺した

「じゃあね」

そして桜は終わると、俺たちの方へ歩いてきて、俺の横を通るときにそれだけを言って、歩いて行ってしまった。俺たちはそこで起こつたことが現実離れしていく、少しの間動けなかつた。分かつていたことなのに、『今まで知っていた桜が容赦なく人を殺す』その現場を見たか見てないかの差なのに、震えが止まらなかつた。あと一回。その後には自分もああなるかもしれない。初めは助けてと叫び、次第に意味のない叫びに変わつて、その後には人でえないような叫びに変わり、殺される。今、目の前にいる首に包丁が刺さつた男のように……

「大丈夫か？ 快。」

心配した良にそう声をかけられたが、返事ができなかつた。今口を開けば吐いてしまいそうだつた。俺は口を押さえながら、ゆつくりと男に背中を向けて、病院の方へ歩き出した。良も後から付いてきたが、結局喋れるようになつたのは2時間後だつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7487z/>

gradge

2012年1月5日18時52分発行